明治三十七年八月二十五日發行
（明治二十年十一月本會創立）

婦人衛生雜誌

第百七拾七號

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
毎月一囘二十日發行
内務省許可明治二十一年二月二十八日

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

第百七拾七號　目次

會告

東京醫科大學助教授
醫學士　磐瀬雄一君

本月より氏の専門とせらるゝ本誌産科婦人科の欄を擔當寄稿せられ候に付此段會員諸氏に告ぐ

明治三十七年八月

私立
大日本婦人衛生會

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を啓きたるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんを皆ともに希はざるはあらざれども其身健康にあらざれば此生活を得んをいとも易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずといへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいと緊要のことにして皆婦人のもつはら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其面目を改めんとするは實に喜ばしきことなりされど其衛生の事に至りては更に注意を怠るもの〻如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志の婦人集ひ謀りて一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々を招請して衛生上諸般の講話演説談話を聴き互に相研究し傍ら之を記して冊子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を叙べて廣く江湖の諸姉に告げ其賛成を仰ふくことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則

（明治卅二年十一月改正）

●第一章 目的 第一條 本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持するの方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ以て社會一般の幸福を增進するにあり ●第二章 名稱 第二條 本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く ●第三章 會員 第三條 本會員たらんと欲する婦人は何人にても入會するを得 第四條 入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込むべし入會者には會員章を交付す（交付手續料末に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし 第五條 會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす 終身會員は一時に金廿五圓以上出捐會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす 第六條 [illegible]子にして本會

[illegible] 年三月の總會に於て會員の投票を以て之 [illegible]

第十六條 [illegible]

但衣服は總て質素たるべきこと

[illegible]

本會雜誌を以て報告すべし第卅二條 會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送費として別に返信料を添へらるべし(郵券送一割增)第卅三條 會費は東京府下に限り毎月領收人差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所宛の郵便局(麴町飯田橋通宛)振出しあるべし第卅四條 會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若くは廣告することあるべし

第卅五條 本規則は會長の意見又は會員二十名以上の賛成に依り總會の決議を經るに非されば之を更正することを得ず

事務所 東京市麴町區飯田町六丁目三番地

私立大日本婦人衛生會

●役員姓名

總裁 東伏見宮依仁親王妃周子殿下

會長 侯爵夫人 鍋島榮子

副會長 濱尾作子

(いろは順)

幹事 鳩山春子
仝 羽田三紀子
仝 岡田徳子
仝 高木かう子
仝 山木多穂子
仝 松平芳子
仝 三浦教子

評議員 伊集院しけ子
仝 石川貞子
仝 濱田捨子
仝 仁禮壽賀子
仝 西丹子
仝 穂積歌子
仝 緒方悦子
仝 岡山とし子
仝 男爵夫人 加藤鈴子
仝 片山繁子
仝 子爵夫人 田中いよ子
仝 丹波貞子
仝 高橋孝子
仝 田村きよ子
仝 相馬陸子
仝 男爵夫人 南部限子
仝 中濱芳子
仝 伯爵夫人 松平充子
仝 子爵夫人 松井正子
仝 子爵夫人 松平久子
仝 木塲小ゆり子
仝 岸遜子
仝 三宅藤子
仝 宮本樂子
仝 宮下咲子

●支會 千葉、新潟、山形、宇都宮、茨城、高崎、米澤

本會特別賛成員

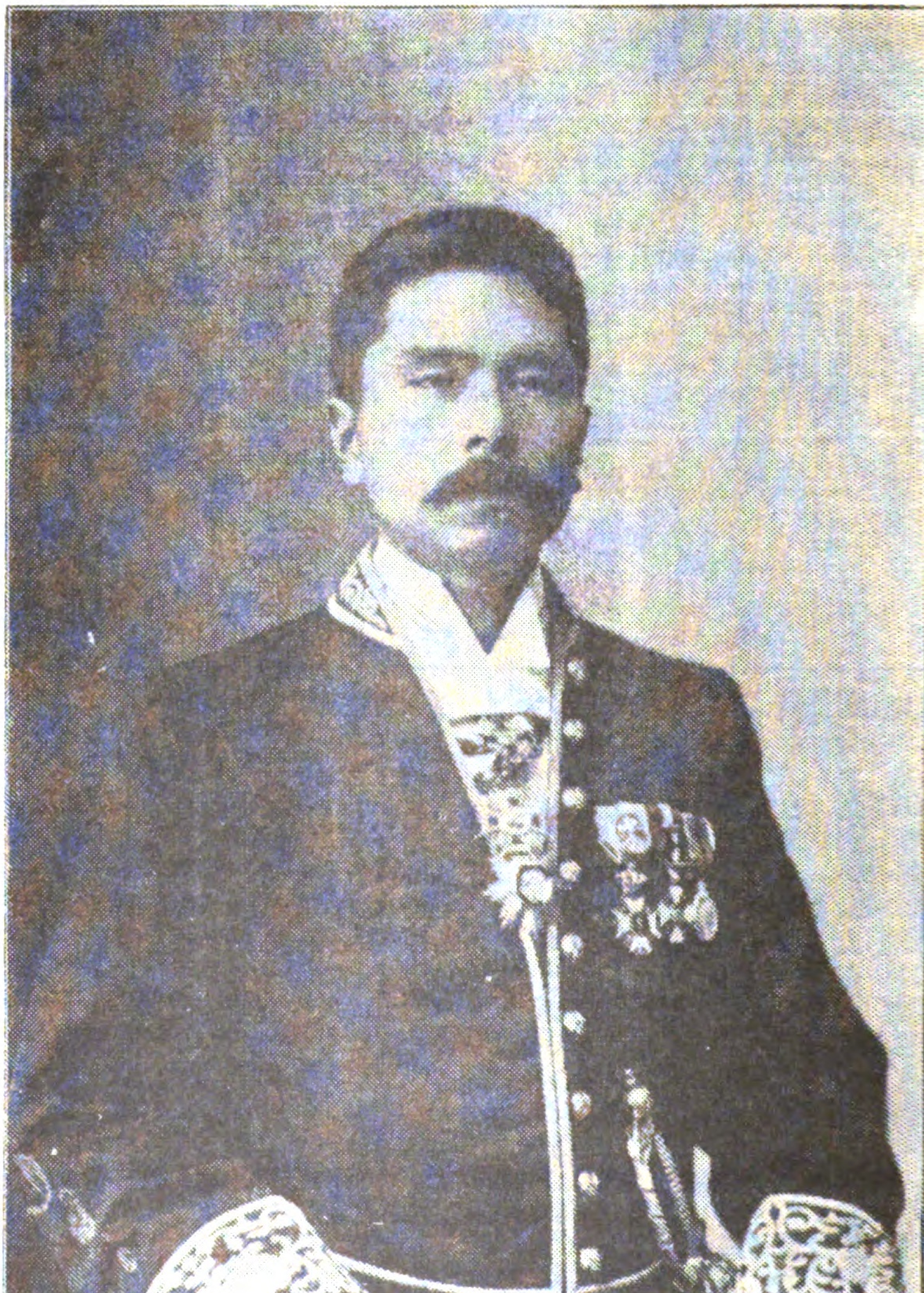
(●は本會及支會に於て講演せられし諸氏)

醫學博士 ●入澤達吉君
理學博士 ○飯島魁君
ドクトル ●伊澤信平君
●色川圀士君
醫學士 ●伊東祐彥君
ドクトル ●飯盛挺造君
醫學博士 ○伊藤隼三君
理學博士 ●石川千代松君
[illegible]教諭 ●岩井禎造君
醫學士 ●石原久君
貴族院議員 濱尾新君
醫學博士 ●濱田玄達君
法學博士 ○鳩山和夫君
東京 萩原綱四郎君
醫學博士 ●芳賀榮二郎君
衛生局長 ●長谷川泰君
新潟 ●長谷川一詮君
小兒科 小原賴之君
醫學士 ●林春雄君
醫學士 ●佐藤達次郎君
醫學博士 ●緒方正規君

歩兵中佐 ●堀内文次郎君
醫學博士 ●土肥慶藏君
醫學博士 ●岡田和一郎君
醫學博士 ●大澤謙二君
醫學士 大西秀治君
醫學博士 ●大澤岳太郎君
一等藥劑官 ●恩田重信君
醫學士 若杉喜三郎君
男爵 ●加藤弘之君
ドクトル ●加藤照麿君
醫學士 ●賀古鶴所君
醫學博士 ●河本重次郎君
醫學博士 ●片山國嘉君
醫學士 ●川上[illegible]君
ドクトル ●金杉英五郎君
醫學博士 ○笠原光興君
醫學博士 ●高橋順太郎君
ドクトル ●高山紀齋君
醫學博士 ●高木兼寛君
法學博士 高木豐三君
醫學士 ●田代義德君
新潟 ○田代[illegible]助君
男爵 高崎正風君
醫學士 竹中成憲君
醫學士 ●高田耕安君
高等師範學校長 ●高橋辰五郎君
藥學博士 ●丹波敬三君
醫學士 高橋[illegible]君
藥學博士 ●田原[illegible]君
醫學士 ●田村[illegible]君
醫學士 ●久保猪之吉君
醫學士 米山[illegible]郎君
三等軍醫正 ●星野[illegible]光君
醫學士 ●宮本[illegible]君
一等軍醫 ●樋井忠[illegible]君

大日本教育會長 辻新次君
理學博士 ●坪井正五郎君
醫學博士 ●長與稱吉君
男爵 南部甕男君
藥學博士 ●長井長義君
醫學博士 ●中濱東一郎君
醫學士 栗本庸勝君
海軍少佐 ●小笠原長生君
醫學士 村松[illegible]三君
醫學博士 ●隈川宗雄君
醫學博士 ●栗本東明君
醫學士 ●山田[illegible]三君
醫學士 ●山田弘倫君
[illegible] ●山根正次君
[illegible] 山川[illegible]二君
醫學士 ●丸茂文良君
[illegible] ●丸山長[illegible]郎君
ドクトル ●松山陽太郎君
ドクトル ●小此木信六郎君
[illegible]學校長 ●小門信八君
鹿兒島 小泉[illegible]君
醫學士 吉川[illegible]君
東京 ●布施[illegible]君
[illegible] ○後藤新平君
[illegible] ●エ、ベルツ君
醫學士 ●甲野棐君
文部書記官 ●寺田勇吉君
子爵 秋元興朝君
前軍醫總監 ●足立寛君
ドクトル ●新井[illegible]君
ドクトル 富士川游君
高崎醫會長 土谷[illegible]次君
産科婦人科 ●水原[illegible]君
ドクトル ●久保田[illegible]君

醫學博士 ●佐々木政吉君
醫學士 ●逵田[illegible]次君
ドクトル ●朝倉文三君
ドクトル ●朝山義六君
高崎 秋田聰太郎君
醫學博士 ●佐藤三吉君
醫學士 ●櫻井郁二郎君
醫學士 佐藤愼久君
ドクトル 佐伯理一郎君
ドクトル ●榊順次郎君
醫學士 ●榊保三郎君
醫學士 ●櫻井恆次郎君
醫學博士 ●桐淵鏡次君
醫學士 ●北村精造君
ドクトル ●北川乙二郎君
醫學士 ●木下正中君
醫學士 ●北島小太郎君
醫學博士 ●北里柴三郎君
醫學博士 ●三浦守治君
醫學博士 ●三浦謹之助君
小兒科專門 ●宮本仲君
理學博士 ●箕作佳吉君
醫學博士 ●三島通良君
醫學博士 ●三宅秀君
醫學士 ●三橋信太郎君
伯爵 土方久元君
醫學士 ●島村俊一君
醫學博士 ●弘田長君
ドクトル ●須田[illegible]君
●ミス ヒユース
醫學博士 森林太郎君
醫學士 笹川三男三君
醫學士 ●波多野[illegible]君
醫學博士 ●矢[illegible]秀三君
醫學士 ●[illegible]雄一君



皮膚病科專門醫學博士　土肥慶藏君

婦人衛生雜誌第百七拾七號（明治三十七年八月二十日發行）

名家演壇

軍隊と花柳病

醫學博士　土肥慶藏君講話
伽速記事務所員速記

私は今日の御席でこう云ふ題を揭げて御話申上げねばならぬ次第になつた事情に付きましては豫め一言御聽きに入れたいと存ずるのです。

それは外でもありませぬが、この花柳病と云ふ誠に恐るべき病は、今は最早醫者や衛生家のみの研究に委ぬべき問題でなくして、實に國家の問題で、更に世界の問題となつて參りました。其譯は千八百九十九年即ち丁度今より五年前に白耳義國の首府ブリユツセルに於て世界の各文明國から醫者、教育家、宗教家、法律家などが會合を催しまして、此花柳病と云ふものは世が益〻文明に趣くと共に益〻流行蔓延して、其禍害は實に國家の盛衰、人類の消長にも關係を及ぼすにより、如何にせば之を豫防し制限し得るかと云ふ問題を研究しました。是が第一回萬國花柳會議で、各國政府よりも公然委員を派出しまして、我内務省からも參りました。婦人の方々も協會を代表したり或は個人として大分出席されまして、七日の間滔々と論戰をしました。其結果花柳病と云ふものは今に當つて之が豫防法を充分に研究しなければ、是の先き如何なる恐ろしい害が生ずるか測るべからざるものである。因て今後は四年每に此萬國花柳病豫防會議をブリユッセルに開くことにして、代表者を出した所の政府に於ては、其決議の箇條の實行を期するため其國々に於ける豫防會を起し、ブリユッセルの本部と相呼應して、其國の事情に應じた豫防の方法を講じようでは無いかと云ふことになつたのであります。そこで佛蘭西に於ては早くも其翌年に道德及衛生豫防會なる名義の下に會が

成り立ち、尋て伯林に於て獨逸花柳病豫防會と云ふものが興りまして、其發會には婦人方の盡力が與りて最も力ありしことが報告されて居ります。今日では伊太利や、丁抹や、露西亞までも、同じ趣意の會を起すやうになつて來ました。

花柳病問題の忽にすべからざることは此でも分りますが、我日本政府に於ては一昨年の第二回萬國花柳病會議にも委員を出して居る位でありますけれども、目下軍國多事の際、まだ充分に其決議を實行するまでに手がまわらないやうであります。併しながら此問題は唯政府の手にのみ委ぬべきものではない、官民一致して研究しなければならぬ事であらうと思ひます。と云ふものは此の病の起り、其傳染の道すぢ、其恐るべき害毒と云ふものを國民が銘々に心得て居なければ、迚も十分に豫防の目的を達することの出來やう筈がありませぬ。幾ら政府は此花柳病と同じ恐ろしい病即ち結核に對して豫防撲滅を發布して、段々と歩を進めて、よしや之を全滅させることは中々出來ない相談にしても、どうかして其蔓延を制限しようと云ふ考になつて來ましたのは誠に悦しいことでございます。

難治の結核すら此通りです、況して治療もでき、又傳染の經路も分明であり、從て豫防の方法も遙に容易でありまして、而も害毒は結核に譲らぬ所の花柳病に對しては、之が豫防の法を講ずることは一日も忽にしてはならぬことゝ思はれます。そこで此婦人衛生會には熱心に力を盡されつゝある衆議院議員の山根正次君や、衛生局長の窪田靜太郎君、警視廳第三部長の栗本庸勝君、それから曾て我政府の代表者として白耳義國へ出張されました前衛生局長の森田茂吉君など我醫者仲間の主唱にて日本に於ても他の文明國に後れずに萬國花柳病豫防會議の主意の貫徹するやうにして、我國民の健全なる發育を謀りたいと云ふことからして、朝野の淑女君子の贊同を求めて日本花柳病豫防會と云ふを起す相談があるのです。獨逸の花柳病豫防會などには、貴婦人方

が皆それ〳〵加盟をして下さつて、總會には大分御婦人の演說もありまして、皇族の御方までも會員となり御盡力なされて居るのであります。夫れてどうか本會の如き教育あり殊に衞生に御熱心な御婦人を代表されて居る會に於て御贊成を願つたならば、此國家衞生上の大目的を達する上に於て最も好都合であらうと考へますので、鳥渡其事を伺ひました所さう云ふ主意であるならば兎も角も一度本會で其話をして見たらばよからうと云ふ御勸めがありましたに付て、今日の仕儀となりたのであります。

殊に此頃は征露の軍が興つて、實に振古以來、未だ曾て有らざる國家の大事件が生じましたが、此の爲に出征いたす軍隊の衞生に就て、我當局者が如何に苦心して居るかと云ふことは、新聞にも見えます通り、廣島や佐世保に於て非常の手段をとりて宿屋、茶屋等の下婢までの身體檢査を勵行したと云ふ事實によりても分ることだらうと思ひます。單にそれだけの事實を以てしても花柳病の豫防が殊に刻下の急務であつて、今後戰爭が終つた節には國民は益々此病の爲に迫害されることだらうと信じます。軍隊と花柳病との間には實に密着な關係が存するのです。

全體、軍隊の如く多人數が狹い場所に集つて居る時は、種々の疾病が發生するのは餘儀ない結果で、此軍隊中に殊に多く發生する病を軍隊病と名づけるのです。然るに兵隊と云ふものは國民中の最も健康な者によりて代表されて居るものゆへ、從つて軍隊病と云ふものは主に傳染病なので、例へば痘瘡、現に滿州露西亞兵中には此痘瘡が流行つて居る、或は窒扶斯、赤痢、虎列剌、ペスト、實扶的里亞、痲疹等にて慢性の傳染病としては結核及び花柳病の如きは亦此軍隊病に屬するのです。

却說此軍隊病は平時に於ても素よりありますが、戰時に在りては殊に盛に流行するので、甚しきに至りては軍隊の戰場に於ける死傷數よりも陣營中病の爲に戰鬪力を失ふ數の方が數倍多いのであります。古い處で一つ例を擧げますれば、彼のナポレオン一

世が五十三万の兵に將として莫斯科まで進んだ間に、其兵數が九万五千に減じたと云ふことですが、此長途には露佛兩國の兵隊の間に大きな戰爭は一二度しか無かつたやうに思はれる。して見ますと此大なる損失は途上兵士が病に罹つて進むことが出來ないで死亡した者が多かつたものと見える。露西亞の側では此時總勢二十一万の兵隊中十七万を失つた。素よりナポレオンは當時長途の暑さを凌びて、さうして寒い國へ侵入したので誠に惡い風土氣候と鬪はなければならなかつたのですから、病の多かつたのは亦無理も無いのでありました。

今少し近い例を引きますれば、千八百五十四年から五十六年にかけてのクリミヤ戰爭、此英吉利と佛蘭西の同盟軍が二年の間露西亞兵と戰つた間に、病の爲に死んだ兵士の數と云ふものも亦實に夥多しかつたと云ふ話は誰しも聽て善く知つて居る。即ち佛蘭西の兵が三十万、其中病院へ入つた數が二十万で、此二十万人中負傷者の數は實に五万に過ぎないので、あとの十五万は實に疾病の故であつた。又英吉利の兵は總勢八万人、その中入院患者一万八千人の中負傷者は僅か二千に足るか足らないで、あとの一万六千と云ふ者が即ち病者であつた。軍隊、殊に戰爭の軍隊に於ける病者の數の如何に多いかは右の數で略ぼ察せらるゝのです。

千八百七十五年より七十六年にかけての露西亞と土耳其の戰爭を觀るに更に甚しいものがあつた、其時の露西亞兵は勇敢で忍耐で善く戰つたことになつて居る、土耳其兵も亦誠に目覺しき働をしたと賞められて居る。斯くも激戰であつたから戰死した數も嘸々極めて多かつたらうと思ひますが、戰死の數と病死の數とを較べて見ると、戰死一に對して病死が九、五の割で九層倍、殆ど十層倍病死者の方が多かつたのであります。

軍隊にとりて傳染病の恐るべきことは是の如くでありますが、輓近醫學が長足の進歩をしましてから、種々なる病の原因が分つて來て、即ち結核は結核菌と云

ふ黴菌の爲に起る、其黴菌は肺病患者ならば重に痰の中に居る、其他の結核病には、亦夫々其結核のある場所に黴菌が居る、此黴菌の巣さへとつて仕舞へば……其黴菌さへ殺して仕まへば、則ち豫防が充分に出來るのである。私共の幼少の時分には痨瘵患者の家には痨瘵病みが出る、之を除けるには病者の亡くなッた時、井戸の中へ御守を投込んで御祈禱をすればよいと只神頼みて豫防の策を講じたのでありますが、病の由來の分つた今日では御守よりも先消毒法を行ふ樣になつて來た。或は虎列剌にした所が、ペストにした所が將た窒扶斯にした所が其黴菌の棲む場所が皆分つて居る。從つて是等の傳染病の豫防法は一方で病毒を散らさぬ工夫をし、且つ之を撲滅する方法を講ずると同時に、一方では病毒に近づかぬ樣にすれば足るのである。即ち都會で水道を設けて黴菌の無い、少い、上水を飲用し、又下水工事を起して病毒を混じた汚物は總て鐵管で遠く市外の一定の場所へ流して、そこで消毒をする。斯く上水と下水の兩方が備はる時は都市の衞生完全に保てるのであります。然るに現時の東京の樣に上水だけはどうにか出來ても黴菌の最も多い上水のどぶ泥を毎日往來に撒布しては全く市民を中毒する樣なもので、折角でき上りた上水の功能もめちやめちやです。又マラリヤ即ち瘧と云ふ病は人の血の中へマラリヤの蟲が入るによつて起るので、濕つた土地に多い。是は濕つた土地には蚊が多い、其蚊が人の血を吸ふ時分に人の身體の中へ此原虫を送るのである。それですから溝渠の排泄をよくし或は水溜を造らぬようにじて、蚊を生やさねば自然にマラリヤの跡を絕つ樣になつてくる。近來臺灣の軍隊にはマラリヤ患者の數が著しく減じたのは爭はれぬ事實であります。又疱瘡の豫防には種痘法があり、實扶的里亞には血淸療法がある。元は馬脾風と云へば助からぬものと極めて居つたが、此頃では大抵皆治る。まだ私が外科の助手をして居りました時分には實扶的里亞の小見は喉頭の所へ穴を開けて窒息を防いだ、それでも

助つた例は少なかつたがけふびは夫れが皆治る。處が露西亞の百姓などはあの結構な種痘をもまだ充分に行はぬと見える。併し他の文明國では時勢と共に軍隊衛生法も進歩して、右等の傳染病に對しても豫防法が相當に改良されて來たですからして今後はナポレオン一世の時代や、或はクリミヤの戰爭、露土戰爭の時のやうな慘狀は追々なくなるに相違ない。現に千八百七十年から千八百七十一年に掛けての普佛戰爭は病死者の數は戰死者よりも少なかつた。即ち戰死一に對する病死○、五五で、殆ど半數に過ぎなかつた。尤も是は獨逸の側だけの計算でありますが、佛蘭西の方は到頭調べが出來なかつたと云ふことです。併しまだ全く蠻風を脱しない所の露西亞の兵隊と、半開の朝鮮、若くは滿州、若くは西比利亞に於て戰爭するは、歐羅巴の眞中に於てするよりは餘程危險の多いことは明かである。故に之を豫防しなければならぬので、此に寒心の至りであります。

以上は一般に軍隊病に就て御話をしたのですが、是から其軍隊病の一つである所の花柳病のみに就て、其軍隊との關係の御話に移らうと思ひます。是は花柳病の歷史より這入つた方が幾分か面白からうと思ふのです。

却說花柳病には三種ありますが、其中最も恐ろしいものは黴毒です。斯う云ふ病の名をば皆さん方の前で口外致すのは如何はしいやうですが、先年萬國花柳病豫防會議の時にも斯う云ふ說があつた、即ち斯かる病の世に蔓こるのは卑猥病の名を人前で言ふのを無作法と誤解し、殊に公衆に對してさう云ふ話をするのは如何にも有害であると云ふ風の僻論が行はるゝからである。人間の罹る病に善惡はない、結核であらうと花柳病であらうと、感染の道にもさう變りはない、それを徒に口を禁みて口外せぬこそ却て有害である。それで花柳病の蔓延を豫防せんとするには先づ通俗講話文章によりて之を國民に教へねばならぬと決議されました。さう云ふ點からして私も今日は遠慮なく御話申す次第でありますが、黴

毒なるものは何時頃から世界に存在するのであらうかと云ふ點に就ては隨分是まで學者が研究しましたけれ共、未だ一定しないのである。兎も角も歐羅巴では十五世紀の終り迄は誰も慥に此病を知つた者がない。古い醫書記錄の紙を調べて見ても此病と認むべき證據は無い。日本でも昔の醫書の中には疑はしき病名はありますけれども、確に夫れではないので、恐らく歐羅巴から文明と共に輸入したものと私は信ずるのです。さらば歐羅巴にはどうして此怖るべき病が起つたかと云ふ其關係を一つ講究して見ようと思ひます。

十五世紀の終りに當つて佛蘭西にシャール八世と云ふ王樣があつて、年若で、當時まだ二十代でありましたが餘程血氣盛んな英雄であつた、此人が、伊太利の征伐を思ひ立たれたのが千四百九十四年で、其年の七月と云ふに佛蘭西のリオンを軍の首出として伊太利の國中に攻入つたが、到處連戰連勝で沿道の民は其威風に懼れて簞食壺漿して王の軍隊を迎へました。街道に逢はぬ樣に醜い目に逢はぬ樣にと種々手を盡して御馳走をしました。然るに佛蘭西は今こそ生粹の文明國、文明國中の文明國でありますけれども、當時にありてはまだそう開けて居らなんだので、文明の中心は寧ろ伊太利にあつたのです。十五世紀の終りと云へば所謂レネッサンスの盛時であつて、中古の暗黑時代が過ぎ去つて新思想の文明の曙光が伊太利國から照り始めた時代に當つて居る。彼の有名なる大調子、西洋の大探幽のラファエルは實に此時代の人である。此ラファエルに對して隱然敵國であつたミケランゼロ、云はゞ西洋の大運慶、大左甚五郎たりし豪傑も亦此時代に於て其巨腕を振つたのである。此兩個の名人、空前絶後の名人並に其門人は競うて伊太利の都市を綺麗に飾つた、其描たもの、其建築したもの、其彫刻したものは今も尚ほ世界美術の模範として珍重されて居るのである。日光を見ずに結構を云ふなと申ますが、實に伊太利を觀ずに美術の話はできぬ位である。其文明の伊太利

へ北狄の佛蘭西國人が還入ては宛も極樂へ參つたやうな感じがしたらうと思はれます。實際シャール八世の軍隊は美酒と美人に有頂天になつたが幸ひに無事で、遂に伊太利の南方なるナーボリイまで進軍しました。此ネープルスにカステロ、ヌオーボと云ふ堅固な小さい城壘がある。是は今も遺つて居りますが、其城へ立籠つて居つた兵隊が頑固の抵抗をして中々屈しなかつた。併ながら旅順ではないが到頭落城せずには已まない。それてシャール八世の軍隊は此城を取り圍みて滯陣して居る間にも種々の亂行を盡しました。所が茲に不思議なる一大事が起りました。そは駐屯軍の中に今迄は聞もせず見もせぬ一種の怖るべき軍隊病が流行し始めたのである。啻に軍隊のみならず、延いてネープルスの市民中にも猛劇なる勢を以て蔓延した。軍隊も斃いた、ネーブルス市民も亦斃いた。今迄は默つて居つた市民も襲る敵の亂行に、かてゝ加へて怖ろしい病を敵が移したと思ふたものですからして、到頭戈を取つてシャール八世の軍隊に反抗を始めました。

されば流石の豪傑シャール八世も今は這々の躰でネープルスを引揚げ沿道の敵を切り拔けて、明れば千四百九十五年の三月に再び里昂に歸城した。然るに當時の兵隊と云ふものは、徵兵ではありませぬ、支那兵見たやうな傭兵である。各國の人民より給金で傭はれて居る兵である、佛蘭西人は固より瑞西人もあり、西班牙人もあれば、獨逸人もあり、スラヴ人種の露西亞人も亦居つた。往きには無慮三万八千の兵が歸つて見れば途中で戰死したり、逃亡したりして殆ど皆亡くなつた。名譽ある戰勝を以てネープルスまで入つたシャール八世の軍が一年の後に何等の獲る所なくして僅に本國へ歸つて來た時に殘て居たものと云へば只黴毒と云ふ新しい傳染病のみであッた。そうして逃し兵が本國への第一の土産も亦此病氣であッた。即ちシャール八世の此遠征軍は戰勝の名譽の爲めでなく却て此恐るべき一の花柳病を歐羅巴に、世界に蔓延させた不名譽の爲に、永く歷史に北

名を留めたのであります。

そこで此黴毒が果して千四百九十四年にネーブルスに始めて流行したとすれば、ネーブルスへは何處から來たかと云ふ疑問の起るのは當然である。ネーブルスの人は佛蘭西の兵が持つて來たからとて之を佛蘭西病と名け、佛蘭西人はネーブルスで起つた病であるからネーブルス病と稱へ、孰れ黑白は分り兼ねて居りましたが、今まで多數の學者は黴毒は素より古代から歐洲に存在したのではあるが、夫れが戰爭の結果で一時に流行し來りた爲に、始めて世人の注意を惹き起すに至つたのであると、こう云ふ說に略歸着した。然るに玆に面白き新事實が探究されたのである。即ち黴毒は亞米利加から來たのであると云ふ說で、それは斯う云ふ次第なのであります。彼の西大陸の發見者たるコロンブスが西班牙より出帆したのは千四百九十二年の八月三日である。夫より幾多の危險を凌ぎて十月に至りてキユーバに達し、十二月にハイチー島に到着して、此處から引返へしたは翌千八百九十三年の一月十六日で、三月十五日には無事に西班牙の都に歸着したのであります。然るにコロンブスの一行中にデアツ、デ、イスラと云ふ醫師が加つて居つた。此人の記錄の中に新大陸より歸航の船中、水夫の間に未だ曾て得知らぬ病が發ツたとて其容躰を精密に記して居るのが即ち黴毒の症候である。其醫師は其時丁度三十歲であつたと云へば、已に多少の經驗は備へて居つたに違ひないから是迄見聞きせぬ病であると云ふ其言葉には間違なからうと思はれる。

所がコロンブスが西班牙に歸着した翌年は恰もシャール八世が伊太利の遠征軍を起した年に當つて居る。そうして西班牙とネーブルスとの間は遠いやうではあるが、實は海一つ隔つるのみで、宛も長崎と香港の間見たやうなもので、往來頻繁の航路であつた。そこで其ネーブルス中に籠城して居つた兵隊の中には西班牙人も居つたと云ふとである。一年前に亞米利加の土人から輸入した病は當時多少已に西班

牙人の間に蔓延して居つたと見れば、ネープルスに籠城の西班牙人中にも其病に罹つた者があり得る次第である。且つ當時の習慣として軍隊は必ず婦人を伴ふて居つた。此婦人は城中に段々と兵粮が盡きかけた時皆城外へ逐り出された。佛蘭西の兵は直ぐに其婦人を捕へて我陣營の内に圍つて置た。すると間も無く黴毒が流行し始めた。斯ふ云ふ始末でありますから、私は此病は古來亞米利加の土人の病であッたのがコロンブスの一行によりて西班牙に入り、西班牙人によりてネープルスに入り、遂に全歐洲に擴がッたと云ふ說に左袒いたすので、而して軍隊が實に其媒介をなしたのであると信じます。

勿論今の世は古に異なり、衛生の道は開け、軍隊の紀律は嚴肅でありますから、決して心配は入りませぬと云ふものゝ、昔も今もさて變らぬものは人情でありまして、此人情に基いた病と云ふものは、隱微の間にどう蔓延しないとも限らぬものである。現に此間廣島附近に於ける模樣を聞きますと誠に氣遣はしき有樣であつて廣島から朝鮮へ出征した兵隊中、韓國の或る病院へ入院した患者の二十五プロセントと云ふものは、實に花柳病であつたと云ふことを聞きました。眞僞の程は確でありませぬが、兎に角是は廣島で受けた病が彼處で發したので、爲に戰爭に加はるとが出來なくなると云ふのは、本人にとりても誠に殘念の至りであらうと思はれます。

話が少し外れましたが、却說前申した病がどうして歐洲から遙か日本まで傳播したかと云ふとを詮議立て見ませう。是は西洋と東洋と何時交通が始まッたかと云ふとから研究しなければなりませぬ。葡萄牙人ワスダガーマが始めて喜望峰を廻つて印度へ到着したのは千四百九十八年でありまして、シャール八世がネープルスを討つた年から四年の後に當り、歐羅巴には既に到る處黴毒が流行して居つた。夫れから葡萄牙の艦隊が支那の廣東に上陸したのが千五百十七年である。此間に於て葡萄牙の商人は既に印度と廣東との間を往來して居つたことは勿論である。

そこて支那の醫書には黴瘡なるものは弘治の末、正徳の始めに於て嶺南より始まるとあッて嶺南とは支那の南方即ち廣東地方のことで弘治は千四百八十八年より千五百五年まで正徳は千五百〇六年より二十三年に當ッて居る。又日本ではどうかと云ふと永正九年壬申即ち西暦千五百十二年に初めて人民に瘡あり稀に見る所之を唐瘡又琉球瘡と云ふと舊い記録に見えまする。是に由りて觀ますると葡萄牙人が印度へ來て後、直接に又は印度洋沿岸の人民を介して間接に此病を支那に傳へ、支那より之を日本に傳へたものであると云ふとは明白であらうと思はれます。此永正より元龜天正にかけて十六世紀時代に當り我國では群雄割據して相爭ふた戰國の世の絶頂でありましたから、新に南蠻より輸入した病は軍隊と共に忽ちの間に日本に蔓延した。其證據は關原の役もすんで天下は太平の世となりし當時の記録を見ますると諸國の大名で所謂唐がさに惱まれた者がいくらもある。今三上博士等の編纂中なる大日本史料に引用せる岩淵夜話別集の記事を御聽きに入れやうと思ひます。それは越前宰相結城秀康卿の御黴瘡の一節であります。

三河守秀康卿御若キ時御腫物ノ煩ニテ久々御引込御養生アラセラレ御快氣故御病後ノ爲御禮登城可有トノ義ニ付家康公殊外御機嫌ニテ樣々御馳走ノ用意仰付ラル既ニ當日ニ至リ三河守殿御登城有之處ニ家康公御傍衆召寄ラレ秀康御面躰ハ前々ノ通カト御尋ナサル、ニ付御別條無御座候ト申上ル處ニ鼻ノ形モ替事ナキカト重テ御尋遊ル、ニ付御鼻ノ形モ常ノ通ニ御座候但未ダ御痛ナト候ニヤ御藥ヲ付ラレ候ト申上レバ忽御氣色損ジ（中略）家康公仰ラレケルハ秀康事今度ノ煩ニテ鼻ノ損シテ見苦シキト有義ハ我等能聞屆テ知タル義ナリ然ルニ先日登城ノ節鼻ノ形ノ能ク見ユル樣ニト思藥ヲ付タルト聞タル腫物ナラバ藥ヲ付ルニ不及義ナルニ鼻ノ損シタルヲ隱サン爲ノ張付藥ハ三河守ニハ不似合、惣シテ美男ヲ好ムハ公家カ町人ノ

事ナリ形ノミニクキヲイフ事少モナシ人間ノ煩ニハ品々有事ナレバ目ノ玉ノ抜出ル事モアレバ口ノユガム事モアリ手足ノ指ノ落カヽム煩モ有ナリ是皆病氣故ナレバ何程見苦シキトテモ少モ恥ニ非ズ然ルニ家康ガ子ニ生レ三河守ト呼レ一方ノ大將タラン者ガ鼻ノ形ノ見ニクキナトヲ苦勞シテ張藥ヲ致シ見能様ニト有ハ沙汰ノカキリケカレタル心也

流石は太平の天下三百年の礎を置かれたる家康公だけに其御言葉一々道理に當りて居ます。

總ジテ大將ノ數寄好ム可キヲ家中又披官迄モ見及聞傳テ似セタカル物ナレバ假令ノ事モ人ノ上ニタツ身ハ大事也（中略）此旨能々三河守ニ申聞ヘシト仰ラレ同御對面ノ日限ヲモ仰出サレケレハ秀康卿モ一入添次方ニ思召シ

今度は鼻の治療を御取りになッて更めて御登城有之處ニ最前ノ御支度ニ増リタル御馳走ニテ御秘藏ノ御道具ナド品々拜領仰付ルヽ也

とありまして誠に學問以外に益ある話のやうに思はれますから、其儘讀み上げた次第ですが、却說此一記事を見るのみでも當時如何に黴毒が蔓延して居ッたかと申すことが察せられます。

又當代記に慶長十二年「閏四月八日越前中納言秀康逝去、年卅四、日來唐瘡相煩、其上虚也」とあります。此慶長十二年は西暦千六百七年で、歐羅巴に黴毒の始まッて後百餘年にしかなりませぬ。秀康卿は戰國の世に生れ給ひて隨分強壯の御躰格でもあッたらうと思はれます、殊にすぐれた英雄の質で入らして、嘗て某と云ふ傾城の郷を御覽になッて御泣になッて、何故此御遊興の座で御歎き遊はすかと御側の臣が伺ッたら、渠は賤しき女の身を以て其名天下に聞ゆるに、我は男に生れて此女にも及ばぬと仰せになッたと云ふ話がある。斯る豪傑の方が御歳僅に三十四歳で御逝去になッた其原因はと尋ぬると日頃唐瘡にて其上虚なりとあれば膀胱の病でも煩ひ給ひしと見えます誠に以て惜いとてありますが、彼のシャ

ール八世なども千四百九十八年に二十九歳を一期として若木の花が散ッて居ます。

右の如く花柳病殊に黴毒は交通不便の十五六世紀の世に當りて瞬く間に世界中に蔓延し、而して其蔓延には軍隊が與りて最も力ある次第であります。

他の急性傳染病、例へばペストの如きは西洋で黴毒の發生以前に大流行をして、國々、村々、家々で罹らぬ者は無く、歐羅巴は中古の闇黑時代の終りに於て戰爭、飢饉、流行病此三ッの爲に大疲弊をしたが、就中ペストの慘害は獨逸の詩人ゲーテイのファウストと云ふ脚本を讀みても察せらるゝ。其ペストでも又はコレラ、疱瘡など他の流行病でも一時の勢は如何に猛烈でも、之に罹ッた者は死ぬるか直るかの二ッで、直れば再び達者になる、疱瘡なら高が痘痕になるだけです。宛も大嵐の吹き荒む時は樹を折り塀を倒し家を覆へすも一旦風止めば却て霽々した上天氣になる樣なものです。况や醫學の進みて其病原も明かになりました今日之を豫防する方法誠に容易いものであります。然るに花柳病や結核の如き慢性の傳染病に至りては一旦世の中に流行すれば永久毒を遺して、年々歳々病勢が加はるのみであッて、シャール八世の十五世紀よりして廿世紀の今日に入りて世界の交通機關の進むと共に、大な都會の發達すると共に黴毒は益々蔓延するのであります。英雄豪傑も之が爲に夭死し、大國民も之れが爲に衰滅に就く。彼の佛國の如きは年々人口の減少するのを見ますが、結核や花柳病の如きは實に人口繁殖の勁敵でありまして、人口が減ずれば戰ひにも負けて、遂には國の亡びないとも限りませぬ。

彼の憐れなるアイヌ人種の如きは日本人の爲に南より北に追はれて、今は僅に北海道の一隅に餘喘を保つのみであります。是は素より生存競爭の結果に外ならぬのですが、現在生殘りて居る蝦夷人に就て先年小金井博士の報告に斯ふ云ふヿが言ッてある。此アイヌ人は將來武器の爲ではなく却て平和の爲に滅亡するだらう。其意味は即ち惡ひ病をうけて遂に滅

亡するのであると言はれたやうに記憶して居ます。實に北海道の如き港灣多き處では舟人の往來頻繁にして病毒の蔓延も亦盛んに遂には人種をも滅亡せしむるの結果を來すかと思へば實に痛心の至りであります。

殊に戰後になりましたならば、他の軍隊病よりも花柳病は最も多く其害毒を逞ふするだらうと思はれます。近くは日清の役殊に北清征伐の後に於ける事實が善く之を證明して餘りあるのであります。今後たとへ横暴の露西亞に打勝つとも、何事も其武勇に伴ふて進步せずは決して真の文明國として万國の尊敬をうくるに至りませぬ。獨逸に遊學して居る露西亞人が常に申して居りました。獨逸人は一向露西亞の事情に通じて居らぬ、彼得堡の市中には白晝白熊が出ると云ふは本當かと尋ねる者があると、こう申して怒つて居ります。併し夫は無理はない。獨逸人は腕力に於てこそ露西亞を畏ると一方ならぬて百方其鼻息を窺ふて居まして、今度の戰爭でも其形迹は歴然として掩ふことはできませぬが、併ながら文明の點に於ては獨逸人の眼中固より露西亞なるものはないのです。今度の戰爭では其勢力すら一向畏るべきものゝないとが分りましたれば、一層隣國の侮りを受るでありませう、自業自得で誠に御氣の毒と云ッた樣な次第であります。

今や我國は千載一遇の時に際會して外に武威の赫々たると共に内は文明の事業に鋭意し、軍隊が血を以て獲たる所の名譽をして益々其光輝を發せしめねばならぬ殷鑑は遠からず露西亞に在るです。而して今日の急務は何よりも先づ健全なる大國民を作るにあらうと思はれます。日本花柳病豫防會なるものは實に此目的を以て興りたる文明的事業でありまして、啻に我國の爲のみならず進んでは世界の文明國民と協同して廣く我々人類の福祉を增進せしめんことを謀るのでありますから、本會の如き衞生を目的とせられます有力なる會の御援助を得るは最も望ましいとと存じます。

（完）

●海軍雜話（於木曾）（前號の續）

子爵　海軍中佐　小笠原長生君

こゝに面白い事があるのです、　三河丸が沈沒に行く前に、本艦から皆撰り拔いた勇士が行つた、其時に斯う云ふ事がある、

『三河丸に移りたる後は日々罐詰牛肉ばかりてあるから大尉は兵士をねぎらわんが爲め艦内を搜索して漸く鷄數羽を得て之を兵士に與へしに誰一人進んで鷄を料理せんと云ふ者なかりし故、余も強て殺せとも言はず、遂に一羽も殺さゞりしのみか、十分に餌を與へ、上甲板、艦橋、其處此處の嫌ひなく自由に飛歩かしめ飼放し置きしが、爆發の後は如何せしや、自分等も何れ今日か明日の中死するものと思へば、妙な所に同情心慈悲心起りて、一羽の鳥さへ無慘に殺すに忍びざりしなり』

斯う云ふ事が書いてある、是などは一個慘酷と云ふ事と戰爭と云ふ事に付て研究して見たら、一種の趣味が出て來るだらうと私は思ふのであります、

それから今の師[illegible]大尉が沈沒を終つて歸つて來る時に出會したのが佐倉丸です、斯う云ふ事が書いてある、

『港外に出てゝよりは成るべく砲火に觸れざるやう：：：（中略）沖合に居て砲火を受くることも緩くなりたれば、總員に軍歌を歌はしめ、諸勇士の萬歲を叫ぶ聲を聞つけて其方向に進みたり』

と云ふ事が書いてある、其佐倉丸に近頃やかましい白石少佐が乘つて居つたのです、此白石少佐の事は私が此方へ上ります一時間ばかり前に、淺間に乘つて居ります少尉候補生の一部から、白石少佐其時分の大尉が船を出る時の事を精しく書いて私の所へ寄越しました、それを今新聞記者の方へ渡して置きましたから、多分明日の新聞へ出ると思ひます、それを御覽になれば分ります、其白石少佐は淺間艦長の八代大佐から、少尉候補生少尉あたりの精神的教育を與へて居つた、此人は御承知でもありませう三十三年に太沽の砲臺に一番乘をやつて、各國軍隊の間

に日本の勇士として知られた人でありますが、其後或る事情の爲にひどく自分で自分を奉ずると云ふことをやつた結果、昔は武勇一轍の人でありましたが、此頃では非常に温厚な人になつて居りました、私は或る事情のあつた時に多少相談を受けたことがあつて、殊に懇意にして居りましたが、人間が一變したかと思ふやうに温厚になつて居つた、併しながら内に燃えて居る活氣と云ふものは、砲臺の一番乘をやつた時より、より多く近頃燃えて居つたことゝ思ふ、と云ふのは今度出ます前に、即ち明日から新聞に出るのを御覽になれば分りますが、少尉候補生を集めて言つたことがある、自分は閉塞に行つた時は敵の砲臺を乘越さうと思ふ、斯う云ふ事を言つて居つたさうです、それが一人も歸つて來ないと云ふのは甚だをかしいのです、それで是がボートが途中で顚覆したとか、或はボートに乘移れなかつたとか云つても、一人や二人其中で助からうと云ふ考を有つて居つたならば、必ず收容艦に收容されるに相違ない、それが一人も歸つて來ないのはをかしい、と云ふのは白石は斯う云ふ事を言つて居つた、自分は思ひきつた事をやらうと思ふ、併し是は無理に命令はしない、自分が連れて行く者が一同同意をしたならば、其事を行ふ積りであると云ふ事を言つて居つた、此間も八代大佐の所から斯う云ふ事を手紙の中に書いて來た、白石の告別は簡單であつた、艦長から受けて居つた御教訓を能く守つて本分を盡す積りでありますと云ふ事を言遺して行つた、然るに白石も歸つて來ず、其他の者も一人も歸つて來ない、余は今も尙ほ彼等を待つと云ふ事が手紙の中に書いてあつた、それを以て見ても必ず一同と約束をして、さうして其同意を得て或る非常な激しい事を、四艘の人等は皆やつたのではあるまいかと私は思ふのであります、あなた方も御承知でありませう、露西亞から來ました報告に、日本の或る將校は海戰史が始つてから類例の無いやうな果斷の事をやつたと云ふことが書いてある、他の報告

は黄金山に二十人の日本の兵員が斬込んで、十二人は斬死してアトの八人は力盡きて生捕られた、又此方の威遠砲臺の方には三十人ばかりの兵士が斬込んで、是も或は戰死し或は生捕られたと云ふ事が書いてある、それから最も激しいのは港の中に甲鐵艦が一艘居た、其甲鐵艦へ日本の人が三人行つた、士官が一人兵士が二人行つたさうです、さうして其士官は先方の士官を一人斬つて、自分は重傷を負つて倒れて生捕られた、それに附いて行つた兵士は何も持たずに奮闘して遂に生捕られたと云ふ事が書いてある、或は今日彼の多數は力盡きて生捕られて居るかも知れませぬ、けれども是は實に名譽の話であつて、寧ろ死するに勝る立派な擧動をしたものであらうと思ひます。

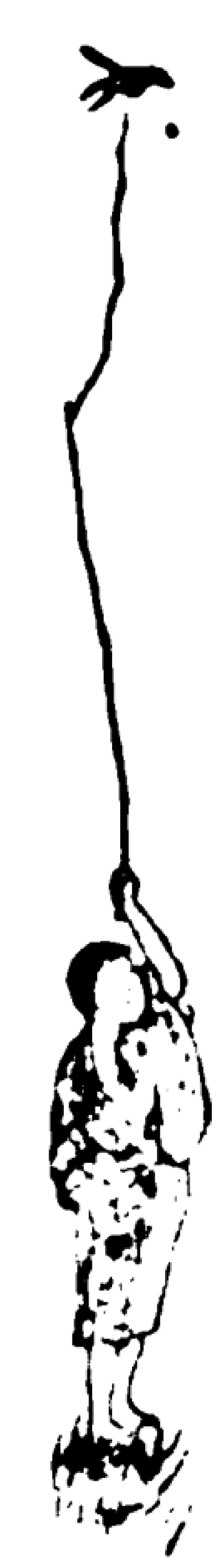
さう云ふ激しい擧動の出來るのはどうして出來るかと云ふ事を一つ研究して見なければならぬ、成程精神と云ふ必要もあらう、けれども精神と同時に身體が壯健でなければ出來ぬ、既に朝顏丸に乘つて居つた一人の死體が沖に浮いて來たのを拾上げて見た所が、小銃の彈丸を八つ受けて居つた、それから大きな彈丸を二つ、合せて十の彈丸を受けて居つた、兎に角海の中へ落ちる前に此傷を受けたと見なければならぬ、それは精神と共に身體の壯健であると云ふ事が非常に必要であつて、即ち丈夫の身體には丈夫の精神が宿ると云ふことは爭ふべからざる事實であらうと思ひます、前に申しました通り海軍軍人の病人の比較を見ると、一万人に付て多いのが九十六人、少ないのは四十三人と云ふ割合である、さう云ふやうに我兵員は身體を大切にして益々奮闘をするであらうと思ひます、是は即ち直ちに國民の觀念を代表した事でありまするし、殊に斯う云ふ衛生會と云ふやうなものは愈々是から必要を感じ、又軍隊の勢力に非常な關係を有つべき會であらうと思ひますから、いろ〳〵取混ぜて御話を致しました、今日は是から又少し用事がありますから是だけに致して、又何れ時機を見て御話を致します。(完)

家庭看護法（つゞき）

醫學博士　三宅　秀君口述

遠い處へ病人を運ぶと云ふのは醫師の家へ診察を受けに行くとか、或は病院へ行くとか、又は出先で病人が出來てそれを自分の家へ運び返すとか云ふやうな場合は、一丁や二丁位の處ならば宜いが、半里も一里も遠い所へ病人を運ばなければならぬやうな場合が隨分あるのです、昔は病人を運ぶのに坐ることの出來る病人ならば駕籠で運びました、現今ならば駕籠はムいましても車の挽ける土地ならば先づ人力に乘せるのであります、それも出來ないやうな病人になりますれば御承知の通り吊臺で運ぶのであります、人力車は病人を運搬するには誠に不適當なものであります、何となれば車でありまするからしてどう致してもドン／＼と云ふ激動が病人の身體へ響きますので、或病人に依つては響きに堪へませぬて車を用ゐることが出來ませぬ、それから車は乘つて居りますと病人が餘程太儀であります、介抱する者が合乘でもして抱へて居るやうにでも致しませぬと前回に申しました通り病人は起直つてちよつと立つても右へ傾いたり左へ倒れたりして支へてやつてもよろ／＼する位に衰弱して居る者があります、さう云ふのはどうしても人力車で運ぶことは出來ませぬ、是非駕籠か或は吊臺に致さなければなりませぬ、駕籠は至極宜しい、駕籠に致しますと背後に倚掛がありますから此中に夜着を被せて行きますと倒れるやうなことがありませぬからどうしても疲勞が少ない、それに閉ぢてありますから寒い風などに當りませぬ、殊に宜しいのは擔いで行きますのは人の脚でありますから激動がどうしても少ない、日本のやうに良い病人輸送車が出來て居りませぬ國では駕籠吊臺等が一番適當なものでありませう、吊臺でございますと寐た儘で夜具蒲團を中へ入れまして運ぶことが出來まするし、夜具蒲團ばかりではない病人に附

嘔して居りまする藥劑の殘だの、或は途中で吐瀉でも致します虎列剌のやうな病氣でありますれば、便器或は吐瀉物を受くる器でも、それ等も中へ入りますし、或は途中で咽喉が乾いても飲料に用ゐるやうに水なども吊臺の上に一緒に持つて行くことも出來ますし、詰り狹い病室へ棒を通して擔いで行くやうなものでありますから、吊臺は寧ろ我國の病人運搬の器械としては一番宜いのであります、然るに在來の吊臺で病人を寢かして其上に油單を掛けたものを持つて歩くのは甚だ不體裁でありまするし、或は風の烈い日には風に吹き曝らされるやうなことは氣の毒であるし、又炎天に照らせるのも氣の毒であります、さう云ふことの無い爲に漸次吊臺も改良せられまして、近來傳染病者を避病院へ送る吊臺などは餘程改良を加へられて居ります、それでありますからして此吊臺の改良したのを以て滿足して居りますればそれで宜しいのでありますけれども、吾々はそれよりもう少し好いものを知つて居りますからして、もう少し便利な、看病婦も共に乘込んで行くことの出來るやうなものに致しますると病人を運搬するには甚だ宜しいのであります、（未完）



婦人と小供

醫學士　唐澤光德

●夏期に就いて小兒に注意すべき疾患（つゞく）

夏期に多くある腦膜炎、之は當時其原因に就いては小兒科醫間の研究問題となつてをりまして、或は黴菌―腸の中に一種の黴菌がわいて、之が軆內に吸收されて起るとか、或は下痢、慢性に惡い不消化の便を下痢してゐる間に腦の症狀が起つてくるなどまだ一定して居りませぬが、兎に角、非常に重い疾患で此頃統計を一寸とつて見ましたら、百人に概五六拾人、出來の惡るい時には百人に七八拾人位は死亡致してをります、

此病にかゝる小兒の年齡は大概六七ヶ月から一年二三ヶ月迄、所謂る生歯期の前後に限りまして、然發の善惡には毫も關係しない、むしろよく肥つて居る小兒にまゐります

此病氣の症狀は種々あつて一定しませんし、また素人方には大分むづかしい點があるから、委しくは申しません、只概ねは初じめ不消化の便を兩三日漏して居る間に、小兒の意識が溷濁して來、何となく樣子が變になつて、手足を振るわす樣な事を致し多少の熱が伴はれる其内に痙攣を起してまゐります、痙攣俗に云ふひきつけを起してから後の經過は種々あつて、或は兩三日の後に死亡し、或は數十日の後僅かに快癒する

て前申した樣に百人中七八十人も死亡する恐ろしい病氣だから、もし此病の始まりではあるまいかと思ふ懸念があつたら、例ば小兒が何となく刺戟性になり、手を振るわしたり樣子が變りなどしたら、直ぐに醫師の許を尋ねられて相應の處置を受けられるがよい

●疫痢に就いて

七月の末頃から疫痢の流行と稱して大分新紙上に記載されてあつた、此病に就いては諸大家が已に充分說明せられてあるから別段申し上ぐる迄もないが、しかし何も本年に限つて流行した一の恐ろしい病であるとは受取れない、只二三の醫師がさも事ありげに、新らしき病でも發見した樣に吹聽した樣な處も見受られました、論より證據其疫痢が流行してゐると云ふ所謂る疫痢流行地から來た患者の解剖も、またある開業醫が疫痢と診斷して治療して居つた患者の解剖にも出會つて見ましたが、一度は赤痢で、一度は急性の小腸加答兒でした。

尤此急性の小腸加答兒、醫師の方で云ふ急性濾胞性腸炎と疫痢とは同じ物であるとは、現今小兒科醫師中の有力なる人達の意見でございますが、委しい事は兎に角、此樣な急性の下痢で急に殪れる腸胃の病は毎年七月の下旬頃に最多くあつて、八月になれ

ば漸次に減つてくるもの、何も「ペスト」程に恐れたものではござりませぬ。

勿論此樣な急性の腸胃病が傳染しやすいのは、只の腸胃から來る下痢でさへ傳染するのであるから、前回に申し上げた夏期の下痢の項中に記した豫防法を充分に勵行せられたら、よろしからうと思はれる。

本月より後になつて恐ろしいのは以上の下痢よりもむしろ赤痢の方が遙かに恐ろしい、殊に本年は東京にも大分發生してまゐつて、蔓延の徴候があるから充分注意すべき疾患である、此赤痢の方は近來は全國到る處にあつて、大分多數の死亡數も出しますし、また都會と云はず、田舍と云はず、到る處に侵入してまゐります。

豫防法に就ては新らしく申し上ぐる迄もない、其原因は一種の有毒な微菌が食物中にあるのであるから之に對する凡ての注意が必要です、委しい事は專門の石原君が御話しになるだらうと存じます。

●海水浴に就いて

僕は今、平生疾患と苦鬪してゐた身體を回復せんが爲に一寸葉山へまゐりました、海水浴の有益なる事に就いても毎年諸大家が話す處であるから、茲では略しまして、僕は自ら其郷にあるものとして、海水浴場に對する二三の注意を申し上げたい、

海水浴場であるから海水に近いのは云ふ迄もない、從つて行つた人の住居する處も海濱に近いのである、第一に茲に住む人として注心せねばならぬのは飲料水です、海濱に近い砂の多い處にわいてくる飲料水には、善良な性質を帶びてゐるものは誠に稀である、水の少々濁つてゐる位はまだしもい丶方で、拾數ケ處探つて見ましたが、いづれも鹽分を含んでゐる、または香ひのするものばかり、とても平生水道の水を飲んでゐた人の身體には適しようもない、少し腸の惡るい人は忽ちに下痢を起しなど致します、此水の惡るいと云ふ欠點を補ふに、最い丶のは砂漉してあるが、之もし急卒の間に合はないならば據なく煮沸した水以外を使用しないと云ふ事に

するより外はない。
次に海水に入る度數である、伴つて伊香保にまゐつた折其處の浴湯の話を聽きましたら、田舍などから來る無教育の人は湯にさへ入れば體力も增すし、病も輕快すると思つて、來着した當日から一日數回甚しきは一日拾數回も、入浴して自己の體力や、疲勞する事などには毫もかまはないから、よく腦貧血樣の狀態を惹起す、俗に云ふ浴あたりをすると云ふ事を聽きましたが、海水に入るのも同樣であつて、之は各自の健康體格に相應して入らなければ、單に利益でない許りでなく、むしろ有害である、健康な普通の人でも來てすぐに三拾分も海水につかれば頭痛のしてくるのも此類でござります、此點に就きましては各自の體力に關係してきめなければならないのであるから、最も注意すれば海水浴に來る前に、相應の知識ある人に、海水に入る度數と時間とをきめてもらはるゝがよい。
第三に一寸した事であるが、海水浴に來られる際に、携帶すべきものゝ中には、ビック、と「アムモニヤ」とを加へられないものである。
「アムモニヤ」の方は來る前に友人から注意してもつて來たのであるが、非常に其效を奏した、之は海水中で水母や「にら」などに刺された時につければ、直くに疼痛やかゆみを止めますし、また腫れも直ぐに引いてしまう、「ビック」之は小供連の方には非常に必要である、元來小兒の皮膚は非常に弱いのであるから直きに腫物のできやすい處へ、海水に入つては砂の上にねころんで、炎天にほされるのであるから、もし少しの傷例へば、かきこわしなどがあると忽ちに膿をもつてくる、此時に此「ビック」をはつて、一日數回も新らしいのを取りかへると忽ちになほりますし、また少し位の腫物でも切らないでなほつてしまゐます、この「ビック」に就いてはまだ絆創膏ほどは世間に知れ渡つてをりませぬが、東京の大きな藥店で御求めになつたら、大抵はござりましよう。
尙何年位の小兒から海水に入れて差つかへがないか

にはまだ世論が一定してをらない様で非常に曖昧のある事でこざります、處により人によりますと、一年未滿位の小兒をすら海水に入れてなる人も見受けられますが、之はいかゞでしようか、尙遙かに硏究致してから、御話し致しましよう。(了)

産科婦人科

●月經時の注意に就て●●●●●●●●

醫學士　磐瀨雄一

月經は婦人一完の年齢に達すれば貴賤貧富の別なく必ず來潮するものにして其初潮の年齢は氣候風俗人情及び階級等により多少異るも大概十四五歳に初まり爾來月經閉止期節五十歳前後に至るの間約三十四五年の間は殆ど每四週に一回宛完期性に整正反覆して來るものにして此現象は生理的即普通自然の現象なるも然も此月經時に於ては婦人は身體及精神共に非常に刺戟され易く些少の不攝生によりて疾病を起し易く殊に生殖器の諸病を誘起するものなるにより之れが攝生に向ては少からざる注意を要するものにして此時に於ける少かの不攝生は他日慢性なる生殖器疾病の原因をなすのみならず甚しき場合には終世難治の頑症を起し一生不快なる生活を送らざる可からざるに至ることあり豈恐れざる可んや而して其來る回數も每四週に一回宛反覆するもの故從て其危險を與ふる機會も多きものなれば此時期に於ける攝生に就き一般婦人が熟知することは必要缺く可からざることなり而して本誌に於ては凡て諸家より月經時の攝生に付き種々有益なる記事續出し居れば尙ほ又余が此所に反覆するは蛇足の感無き能はずと雖も然も尙ほ世人未だ此攝生に就て注意するもの少きのみならず又之れを知れるものも之れを實行するもの少きを以て尙ほ此所に一言を反覆するは無用の事に非ざるを信ずるを以てなり。

今先づ月經の初潮に就て如何なる注意必要ありやと云ふに月經の初潮即初めての月經に就て吾人の注意す可きとは前述の如く月經は大抵十四五歳に達すれば來潮するものなる故先づ年頃の小女に向ては月經なるもの丶大體を告げ知らせ其月經時の出血は生理的即自然のものなれば驚く可きものに非ざるとを豫め告げ知らすは必要の事なる可し如何となれば此事を知らざるものは突然出血に際し自身に何か疾病の起れるものと意思し一人にて心配するも人に言ふを恥づる故已れのみ心痛し甚じきに至りては之れを以て非常なる病氣を得しと思ひ殊に神經質の者に至りては時としては氣が遠くなり又甚しきは痙攣等を起すとなぞあれば此等は前に豫め告げ知らせ置けば斯る無益の事に心痛する必要もなく且つ夫れに對する注意をなすとを得可ければなり而して月經は上述の如く大抵十四五歳遲くも十八九歳に至れば來潮するを通常とするも尙ほ其時期に達するも來潮せざるときは何か身體或は局所に異常又は疾病あるとあれば斯るときは專門の醫士に就き診察を受くるを良しとす同じく人體の臟器の一つなれば胃の惡しきも腸の惡しきも同樣のとなる故別に恥しきとなければ醫者に診を乞ふを可とす例へば身體の弱き人なれば之が爲め月經が來らざるとあるが故斯る人は身體の營養をよくする事は必要なり身體の養ひよくなれば月經も來潮するとあるものなり又或る生殖器外の病氣のため月經來潮せざるとは屢なれば兎に角醫士の一診を乞ふは必要なり又月經を生來見ざるも每月一回宛定期に反覆して下腹痛等來るとあれば之れ又注意す可きとなり。

凡て月經來潮後は每四週に一回反覆するものなれども人によりて月一回と限らず多少前後することあるもそは病的に非ず殊に月經の初まりたる年に於ては不規則なると多きものなり而して月經時に於ては人により身體も氣分も全く平常と異らざる人あれど又人によりては多少の下腹痛、腰痛、頭痛、嘔吐、乳房腫脹の感又は疼痛歯痛、鼻血等あるも之れは通常

にして心配す可きものに非ず而れども此等の疼痛等の障害烈しくして仕事を執るヿ能はず就床するに至るか又は之れが爲め營養を害せらるゝ如きは病的なれば注意す可し。

而して月經時の攝生中最も必要なるは安靜にして月經中は勿論其前後に於ては身體を安靜にするヿは最も必要なり之れに反して身體を過勞せば出血の增加又は疼痛等を烈しくし又之れにより婦人科的疾病を起す元因となるものなり故に殊に月經中及其前後に下腹及び腰部等に疼痛等を訴ふるものにありては身體を安靜にするヿは非常に必要のヿなり而して此身體の安靜とは身體を常に己の使ふ程勞せざるにて格別なる異常なければ普通は就床等をなす必要は無論なきも然し普通の意味の安靜即靜坐し居るヿはあまり宜敷からず殊に長時間の靜坐は害あり之れ生ずるときは身體下部の血管を壓し之れが爲下腹腰部等即骨盤内の血液の循環を惡しくし月經時の障害を增すものなれば長く靜坐し居るヿ例へば裁縫等を長くなすヿは不可なり又避く可きヿは長途の旅行、汽車馬車人力車等に長途又は惡路を乘るヿ、又長途又は惡路の步行、自轉車、乘馬、長く體を屈して仕事するヿ、例へば洗濯臺所にて長く仕事するヿ、又長時間の直立しをるヿ、體操、舞蹈、重き物を荷ふヿ、機などを織るヿ、「ミシン」を使ふ事、其他凡て身體を過勞さするヿは避くるが可なり次に身體の安靜なれど月經時に於ては精神が非常に刺戟され易くして僅かの事にても或は悲み或は泣き或は怒り易きを以て可成精神の刺戟を避るヿは必要なり即月經時には芝居寄席小說等を見聞する事は可成避くるを可とす。

次に必要なるヿは月經中は身體殊に下體を冷却せしめざる事なり之れ月經時には少かの原因にて寒冒に犯され易きものなれば可成全身を溫くするは必要にして殊に寒冷の候に於ては衣服を平常より一枚位多く着する事は必要なり又夜間など外出する事は可成避くる樣にす可し而して殊に下腹腰部より下腹部を冷さゞる樣にするは非常に必要なる事にして此事は

勿論平常心掛く可き事なれど殊に一層月經時に於ては注意す可し即ち長時間板の間、土間、井戸端、又は臺所等にて仕事する事又は脚部を水にて濕し洗足にて濕地を行くが如き事は皆下躰を冷却せしむるを以て之れが爲下腹骨盤内の血液循環を惡しくし疾病の元因となる故に常時と雖ども此等有害なる事は可成避くる樣にし殊に月經時に於ては同時に下腹部及腰部を溫にするヿは非常に必要なるヿなり此保溫に向ては如何にす可きやと云ふに下腹又は腰部は常にフランネルにて纒絡するが可なり即常時にてもフランネルの腰卷又フランネル又はメリヤスの半股引を着用するは可なり又下腹か腰部の冷却の感又は疼痛を訴ふるものに有りては尙ほフランネルの腹卷をなすヿは衛生上良しきものなり。

月經時に於ける食物は別に常時と異るものを取る必要なきも凡て不消化物及風氣を醸すものは可成避くるが可なり之れが爲め腹中に糞便及瓦斯等蓄積し之れにより骨盤内の鬱血を來し從て月經の障害を來す恐あればなり。

次に便通をよくするヿ必要にして此事は常時に於ても必要欠く可からざる事にして而も婦人に於ける便秘は男子に比すれば非常に多くして殊に常習性便秘即習慣となれるもの少からず而して此便秘のため婦人科的疾病を起すヿ多きものにして又此便秘の習慣を治し便利を整調するヿは頗ぶる難しとす而して糞便の蓄積する所は子宮の直ぐ近邊にある故此所に長く滯り居るときは之れが爲め骨盤内の血液順環を妨げ之れがため諸種の婦人科的疾病を誘起するヿとあるのみならず月經時に種々なる障害を來し腹痛腰痛等を烈しくし又月經量を增加せしむ斯くの如き害あるものなれば常時に於て既に之れを整調し置くことは必要のことなり而して輕き便利のものにありては每朝空腹時にコップに一杯の冷水又は一度煮沸し後冷却せる牛乳を一度に内服し又每日時刻を定め一定時に上圊するヿは効あり即便通の有無に關せず例へば每朝起床後等に上圊するを可とす之れが習慣と

なり遂には毎朝便意を催すに至る可し斯くの如くするも尚ほ整調せざるときは上述の法と同時に下劑を内服し漸次其量を減じ遂に全く之れを止むるに至るも毎日一回位少くとも二日に一度位ある樣になす可し然れども常習性便秘のものにありては容易に其効を表はさゝるものなり而して月經時に通常の下劑を用ゐるは差支なきも強き下劑を用うることは避く可し之れが爲出血を多くする恐れあり故に通常下劑にて功なきときは灌腸をなす方可なり。

最後に月經時に最も必要なる清潔なることに就て一言せんに月經時に入浴するは如何と云ふに熱き湯に殊に熱き脚湯を使ふは堅く禁ず可し如何となれば之れにより下腹又は腰部即骨盤内の充血を來し障害を來すを以てなり然れども全身を手拭を以て湯又は水にて拭ひ清潔にすることは必要なり又殊に入浴の必要あれば熱からざる通常の温さの湯に入るは不可なし又常時必要ありて膣洗滌を行ひつゝある人にありては月經時には中止するが可なり之れ此時に際しては子宮が軟く且つ開き居る故洗滌液の深くに入り込み易く之れが爲め害物を深部に送る恐あり故に膣洗滌は行はざるが可なり然し只外陰のみを洗ふなれば差支なし。

而して月經時に於ては外陰部は經血にて不潔となり易きを以て此部分は常に勉めて清潔になすこと必要なり而して此不潔物を清拭するには清淨なる軟き紙布片又は脱脂綿等を用ゆ出來得れは消毒せるものを用ゆるが可なり之れを使用するは小用の度毎又は今次に述べんとする所の外陰に當てたる綿を交換する際にして決して強く拭ふ可からず之れ容易に傷を作る恐あればなり又使用の綿紙等は決して不潔なるものを用ふ可からず。

而して最も注意す可きは月經の流出を防ぐ爲め俗間にては紙又は綿を膣内深く送入することにして之れは吾人が屢目撃する所にて然も非常に有害危險なることなれば例ひ消毒せる脱脂綿等を使用する人にありても之れを膣内深く送入することは嚴禁す可く殊に不潔

なる綿紙を送入するは堅く禁ず可し今其理由に就き簡單に述んに月經時に出血するは生理的のヿにして決して疾病の爲め出血するに非ざれば例へ出血するも決して恐る可きものに非ず、のみならず能く之が排出を計るヿは必要なり之れに反して上述の如く深く綿紙を送入すれば之れが爲め反て月經血液の排出を防ぐるのみならず膣內に排出せられし血液之れが爲め蓄積し此一度膣中に入りて血液再び子宮內に入るときは之れが爲子宮の疾病を起し尙進みては喇叭管卵巢及び骨盤內の疾病を起し甚しきときは腹膜炎なる重き疾病を起すに至る殊に不潔なる綿紙を使用せるとき又は然らざるも長く膣內に入れ置くときは排出せられし血液は腐敗し惡臭を放つのみならず此腐敗せる血液上述の如く子宮等に行くときは其等諸臟器を犯すヿ烈しければ殊に避く可きヿなり故に只知らずして一紙片を膣內に送入せるヿにより之れが爲め甚しきは頑固不治の疾病を起すの元因となる豈恐れざる可けんや。

而らば月經流出に對して如何にすれば可ならんかと云ふに上述の如くなるを以て此目的に向ては第一清淨なる出來得れば可成消毒せるものにして且月經の流出を防がざるのみならず能く外陰衣服下衣等を不潔に汚さゞる樣によく血液を吸集するものを撰ばざる可からず且可成簡單にして何人と雖ども容易に實行し得且つ價も廉ならざる可からず而して此目的に適するものは脫脂綿にして出來得れば消毒せるものを最良とす即此者は流出する血液をよく吸集し少しも排出を妨げず且價も比較的廉なるを以てなり而して之を用ゆるには決して膣內に送入す可からず只膣口の所に輕く當てる樣にす可し而し此儘にては脫落するを以て之れを保持するには最も簡便なる法は柔軟なる白木綿にて男子用の下帶の如き丁字帶を作り之れを以て外陰部に當てゝ脫紙綿をさゆる樣にす可し而して使用の脫脂綿は不潔となれば直ちに交換す可し交換の際にはよく注意して上述の如く淸淨なる綿紙にて外陰のみを能く淸拭し新しき脫脂綿と交

換す可し斯くの如くするときは常に局所は清潔に保つことを得又月經の排出を少しも妨げず即血液の滯留する恐なきのみならず當てたる脱脂綿の脱落を防ぎ立居動作に少しも防げとならず極めて輕便にして實行し易きものなり。

又殊に此目的に向て製作せる月經帶と稱するものあり此月經帶は歐米に於ては諸種のものあり本邦に於ては木下博士の衛生帶なるものあり之れに就ては本誌第百三拾七號八頁紙上に詳細なる圖解及説明有れば就て見らる可し而して月經帶の構造は多少異りたる所あれど皆殆ど同じ構造にして大體の構造は腹帶の如きものありて之れに巾種々ありて巾廣きものは腹巻の用を同時になす樣になりたるものあり先づ此腹帶をしめ而して此腹帶の前後には各一つ宛のボタンあり此腹帶樣のものゝ外外陰に當る可き細長きくゝり枕の如き形にて其中に消毒せる脱脂綿又は柔軟なる木屑を入れたるガーゼーにて作れる袋あり此前後には紐の輪を附着し此枕の如き袋を股間より外陰に當て其輪を腹帶の前後に附着せるボタンに插むものにして此脱脂綿を入れたるガーゼ袋は不潔となれば直ちに交換するものなり以上其構造の大略を述べしなれば不明の所多かる可き故其細きとを知らん人は上述の圖解に就て一見せらる可し。



衛生雜話

醫學士　石原喜久太郎

●水の話

今日、各種の專門學科の上から、水のことを論じますれば、日も是れ足らぬ程で、到底一席のお話でもツて説き盡すべきものではありませぬ、で、私は今回、單に衛生上に關係ある水のこと二三をお話申します。

●水と傳染病との關係

傳染病の內でも、其の病原たる黴菌が水に混じ、之によりて其病氣を傳染傳播する部類のものは種々あります、例へば、虎列剌病、腸窒扶斯病、赤痢病などはそれであります、如此傳染病患者の大便には、それ〳〵の病原菌が含まれてゐて、それが水に混ざッた時は、此水を飲むとか或は使用して、終に口から胃を經て腸にゆき、此處で其の黴菌が繁殖して病氣を起すと云ふ順序になります、是迄、澤山例のあッたことですが、田舍で、谷川や小川の上流に、斯樣なる傳染病が出來て、汚物（大便を受けたもの）を川水で洗ッたとか、汚物を其流れに投棄した爲めに、下流で、同じ水を使ふ家々に、同じ病氣が澤山に發生したなどは皆さんも聞及がありましよう、其ほかまた、或る一ッの井の水を何軒かで用ゐた時にドノ家も皆斯樣な傳染病の患者を發生したと云ふ例もあります、

故に水と傳染病の關係も甚だ親密なる譯合でありましよう。

右の通り、上流に病毒を流した場合にはドウして其の病氣の傳播するのを防ぐかと云ふに、速に布令を出して其川の水の使用を禁ずること、上流から石油の如きものを流して下流の人の注意をひくことなどあります、井戸ならば之は直に使用を止めれば宜敷いのです。

●水の良否と細菌の數と

飲料水は、人間の生活に取りて一日も欠くべからざる必要あるは申す迄も無いことで、吾々には米や鹽と共に、無くてはならぬ物であります、夫故、水の良否は吾々の健康に非常なる關係あるのです、水を一度や二度飲用するとか、一日や二日飲用するとかはトニカク、一年三百六十五日同じ水を飲むならば、其水の性質の善惡が、吾々の身體に及ぼす影響は、ドンナであらうかは、一寸考えて見てもわかりましよう、

水の性質の良否を檢するに當りまして、普通大切なることは、其の化學的性質であります、其內殊に大

切な事は、水の中に食鹽、「アムモニア」、亞硝酸、硝酸等が多く含まれて居る場合には其水は不潔なる惡水であツて、是等は性質のよろしくない水であると云ふ標準ともなるのであります、動物の大小便などが混ずる場合にも斯様なる物が水に現はれます、化學的に水の良否を定めることは略しますが、一寸かう云ふ具合で、他の方面で水の良否を見る方法があります即ち

水の中の微菌の數が多ければ多い程其水が惡いと云ふので、微菌の數で以て、水の性質を見ようと云ふのです、是も今日行はれて居る事であります、水を一立方「センチメートル」(一千立方「センチメートル」は一「リートル」と稱し五合五勺に當る)につきて微菌學の法則により、菌の數を計るのであります、委しいことは述べませんが、實際に惡い水は黴菌の數も多いのです、泥水の如き、溜り水の如き皆黴菌數が多いのです。

水を砂の如きもので濾せば微菌の數を少くすることが出來る、東京、横濱、大阪、神戶、長崎などの市街では。

●改良水道

が出來て居りまして、改良水道の目的は水の内に含んでゐる一定の惡い物を濾して無くするのに在りで、微菌の如きも濾す前と、濾した後とを比較すれば濾した後では其數が餘程減じてゐるのが常であります、水道の給水工場に參ツて見ますれば、大きな濾過池が有る、其底に大きい礫、それから段々に、小さい砂を積んで、其上から水を導いて濾すようになツてゐるのであります、勿論水道の濾過池は細菌の數を少くするばかりではなく、他の不潔物例へば水の内に混じてゐる濁り物等を濾して取るのである、夫故、改良水道の水は此濾過法によりて大層良き水となるのです、乍併濾過池の砂は其儘に長く使用して居ると砂のまわりに汚物がくッ着いて後には水を濾す力が弱はッて來て、濾した水が初程にはよく無い、であるから、時々濾過池を乾し切ッて砂を

取出し、之を洗ふのです、さうすれば、其砂にくッ着いてゐた物は洗はれて奇麗になり、再び使用することが出來ます、但し改良水道とても、決して濾過前の水の性質を全く變ずる程の働はないのである、それと云ふのは、水によく溶けて居る惡き物質迄も濾し去ることは六ケ敷いからです、從ッて改良水道にても可成良質の水源を撰ぶのが必要であります。

●水の良否を見る新標準

是は一昨年頃より衞生學者が主張することですが、要點は、水の内に大腸菌と云ふ黴菌が混じてゐれば、其水はよくないと云ふ標準を立てるのに在るです、其黴菌は、常に人間や動物の腸の内に寄生してゐるので、從ッて其大便には何時も混じて出るのです。日本では、井戸の構造が惡かッたり、又便所の構造が惡かッたりして、そして井戸と便所と近い所にある時には井戸の中に、惡いさし水がする爲めに井水が汚される斯様な場合にはやはり大腸菌が井水に混ずる事がありましよう、それにかぎらず、動物などの便によりても、やはり惡いさし水がすることもありましよう、夫故大腸菌を含有してゐる水は、惡い水であると云ふことを主張するのは大に根據の有ることです、日本ではまだ此事はやかましく云へませぬが、歐羅巴の雜誌を見ますれば、此點によりて大分、水の良否を云々するようであります、前に述べました「アムモニア」とか食鹽とかの類が水に多く含まれてゐれば、其水は惡いと云ふ標準を立てるのは化學的の標準の方で、今、大腸菌の含否を以て標準を立てるのは、黴菌學的の標準であッて、兩々相對してゐると云ッてもよろしいのであります、ドウして大腸菌の存否を検査するかと云ふ事は、黴菌學の方で易しく出來ることで、之は別に述べませぬ。

●自淨作用と云ふこと

河川の水が、上から下に流れゆく間には、水の自淨作用と云ふことが起ります、上流できたない物を洗ッたり、投棄したりして、水が濁ッても、漸く下方にゆくと其の濁り物が底に沈みて、水が奇麗になる

が如きは即ちそれであります。

●滿州に於ける吾軍隊と水と

酷暑の砌に行軍をし、戰爭をして焦熱と戰ひ、敵兵と闘ふ吾軍隊の辛勞は御同樣何とも申すことの出來ない程同情し感謝する次第であります、然るに新聞で見ますと、あちらでは非常に水に困まられる、或處では軍隊が着すれば、すぐに井戸を掘る、出る水はきたない水である、水量が不充分である、行軍中戰闘中には咽が渇いてたまらない、どんな水でもかまわず、口をつけて飮む、と云ふ有樣なりと記るしてあります、誠にそうでありましよう、今日は軍隊の衛生が進みまして、十年昔の日清戰爭の時よりか、大に好況であるけれとも、水の乏しい、惡い土地では仕方のないことです、それで、軍隊の衛生當局者は、種々此點に苦心を凝らして居らるゝことゝ信じます、世間でも軍隊に用ゐらるゝような簡便で有効な水濾し器械の工夫に熱心してゐる人も乏しからぬように聞いて居ります、どうか、充分此の困難を救ふことの出來る工夫を廻らして、將來軍隊の爲めに不便を救ひ、從ッて軍隊の健康を保ち一層の戰闘力を加へ度いと云ふ事は全國民と共に深く祈る事であります、

大家談片

●恐るべき小兒病

瀨川醫學博士の疫痢に關する談話は時節柄適切に覺ゆれば玆に抄錄せん

▲該症の症狀　該症は歐洲諸國に於て濾泡性腸炎と稱する疾患が解剖上の變化臨床上の微候等酷似し居り三歲乃至十四五歲迄の小兒に多く大人に少なく最初は腸の一部に一種の黴菌を生じ血を交へたる下痢を起し其毒の全身に傳播し四十度內外の高熱を發し狂人の如く苦悶し譫語を吐き遂に心臟麻痺を起して斃るゝに至るものにて激しきは八九時間乃至十二三時間に斃るるもあり最も激しきものは腸を冒された

之後に下痢を起すものもありて是等は最も短時間に死亡するもゝなるが下痢を起すのみにて腦を冒されざる場合もあり是等は輕症者なれば大抵二三周間にて全癒すれど總べて短時間に斃るゝもの多く從來態本地方名古屋界隈には著しく發生し疫痢或ははやての名稱を生じたるものにて先年千葉にも十數人の患者を出し東京にても毎年一二人宛は該患者を發見しつゝありたるも本年の如く著しく發生したる事は珍らしと。

▲該症と赤痢の差異　該症の症狀は前述の如くなれば多く腦膜炎或は赤痢と誤診さるゝ場合あれど赤痢は粘液血便を泄出すれど該症は膿狀の血便にて血の交り居る量も少なく殊に泄出の度數も少なければ少しく注意せば其區別明瞭なるべく其病源は不消化の不良食物により腸に疾患を生ずるに起因すれば食物の注意肝要なるべし殊に日光に直射され身體の疲勞せる場合に不良菓物或は氷、水等を多量に飲ましむる事抔は最も注意して避けしめざる可からざる事なりと。

▲病源と患者の消毒　該症は濾泡性腸炎に酷似すれど果して同症なるや否やは尚ほ研究中に屬すれど兎に角本年の如く多數の患者を出し氣候の模樣によれば尚ほ續出すべき模樣もある事故其取締方並に消毒の設備も必要なるべしと最も從來の經驗によれば散發性のもの多く系統を追ひて傳染したるものを發見せざりしかば本年も恐らくは一方面に一時に多數の患者を出したるものなるべしと。

尚ほ博士の下痢に關する談話は左の如し

▲感冒と下痢　夏は消化力の弱くなるので何より飲食物の注意を怠つてはなりません此頃俄に溫度が冷却したので之れが土用中の暑い盛りかと思ふと實に不順極まる氣候であります、何んな壯健な人でも衞生に意を注ぎませんと斯ういふ時に感冒を引き易いのであります、朝夕夫から夜分は尤も着物や夜具に氣をつけて冷えたり又は寢冷をしたりすると感冒や腸加多兒に冒され易いのであります、壯健な人は誠

に衛生など無頓着に見えますが其の實平生の心掛けを見ると頗る衛生法に留意して居りますから虚弱な者は一日も衛生を怠つてはなりません。

▲下痢の原因　近頃は大分赤痢も流行して居ります、今年は斯ういふ種類の流行病が尤も多いから家庭に於ては專ら衛生の方法を講じなければなりません、又隨分腸加答兒から赤痢に變ずる事もありますが併し腸加答兒即はち下痢に對しての一般の注意は先づは飲食物でありますが、喰べるときは腐敗に近づいて居るとも知らずに居て喰べてから存外夫れが下痢の原因となる事があります、毎度お咄しするが氷水や桃や、李、甜瓜、西瓜の如き、不消化物は此際口にせぬように、又夜分は更るまで涼んで居たりすると翌朝は下痢を催すことは之れ迄屢々斯ういふ患者に接しましたから程克く涼んで貰いたい。

▲下痢の簡易治療　一家族殘らず下痢をしたりする事は克くある事實ですが斯ういふのは全く飲食物に原因する事が多いのですナニシロ此の四五日來冷氣を帶びた不順の氣候は身體に宜しくありませんが何ちらかと云ふと下痢は若い時の方が多いのですから御注意をなさい、夫れから重症でない下痢ならば食物衛生で治癒りますから簡易な仕方をお咄し仕ましよう、即ち下痢をしたなら下痢の止まるまで食物を極く節して「おもゆ」と葛湯位を飲んで腹部を温める、之れが手近な治療法でありますが之れで一寸した下痢なら治りますが治つても其の當座は消化力の平生より衰へて居る事を忘れてはなりません。

◉箴言

人の身をたもつには、養生の道をたのむべし、針灸と薬力をたのむべからず、人の身には口腹耳目の慾ありて身をせむるもの多し、古人の教に養生の至れる法あり、孟子に所謂寡慾是なり、省心錄にも多慾傷生といへり、およそ人の病は皆我身の慾をほしいまゝにしてつゝしまざるよりおこる、養生の士はつねにこれを戒むべし。（養生訓）

●掃除の仕方

N. N.

世に空氣の流通悪しき家屋は其住人に不健康を來たすものなり故に時々戸或は障子を開きて新空氣を流通せしむべし縦ひ夜間と雖ども一時空氣を流通せしむるは固より害なし戸障子の透間より入る風は健康に害あり暖かなりとても戸を開くべからず夫れより風吹かぬ方を開くべし透間より入る風は例へば大器に水を盛り僅少に孔を穿つが如し其出る勢鋭くして健康を害す感冒發熱の患は多く之れより生ずるなり殊に小兒の病原に在るものには注意を加ふべし。空氣の流通不良の爲めに生ずる疾病は肺病、瘰癧、神經病等なり。

我國は古來一年に一度若くは夏冬の期に二度煤掃きと云ふ家屋の掃除を行ない其他は毎朝單簡に室内の掃除をなす習慣なれば之れを支那朝鮮に比すれば遙かに清潔なり然れども文明の歐洲に於ては家屋の掃除法尚嚴にして(尤も取除けの場所もあり)心ある人は養生の一と思ひ居れり而して其方法に至りては風俗の異なると建築の別なるに依て少しく趣きを異にす直ちに取て我家屋の掃除法となすを得ず凡て掃除をなすには先づ人目に見えぬ暗き所より始むべし暗き所の塵は見落すものなり又掃き出す所なきは塵取にて丁寧に取るべし又拭ふには濕り雜巾を洗ひ出し固く搾りて拭ふべし塵のつきたる雜巾をゆるく搾りて拭くときは敷居鴨居などの隅に塵たまりて黒き斑を生ずるものなり。

箒を使ふには眞直に立てゝ穂先きにて掃くべし。ねせて掃けば塵充分に去らずして箒は薙刀状に損ずるものなり箒の種類は棕櫚又はゴミ製のものを良とす。

家内にて臺所と厠の掃除をよく行ふこと最も肝要なり臺所は三度の食事を調理する所故に不潔なれば食物も多くは不浄なるべし先づ水はきに注意し腐敗物を捨て庖丁小刀に錆の生ぜぬやう拭き手桶又は瓶の

水は成るべく汲置きにならぬやうになすべし殊更夏は汲置の水を飲用に供す可からず又煮たる食物を皿或は鉢に盛り之れに蓋をなさずして長時間放置すべからず之れ空中の有機物其中に落ち黴を生じ或は蠅等が之れに群集して不潔の媒介をなすに至る芥溜は時々注意し都會にては芥取夫(後得會社)に之れを取らしめ田野にては家を離れたる所に運搬し肥料となすべし家の近くに置くときは汚穢物分解して臭氣を放ち人の健康を害するものなり。

厠は務めて毎日能く掃除すべし之は不淨の所なれば箒、雜巾は別に備へ置き夏時は掃除したる後は五十倍石炭酸或は苛製石灰を撒布するか又は桐の葉二三枚を取り之れを釘に吊るしおくべし然れば臭氣は甚しからざるべし若し來客ある節急に厠の臭氣を消さんと欲すれば桐或は無花果の葉二三枚を取り水を振掛け之れを細く切り尿壺中に投入すれば暫時にして臭氣去るものなり。

新しき疊には土の粉を存す之れは能くはたき取り雜巾を固く搾り拭くべし然し湯にて拭くなかれ之れ疊は赤く變色す又疊に油のこぼれたるときには糠、筆の粉又は石灰を撒布して其上に紙を置き重量を載すべし、天井 或は柱の煤を去るには綿子殼の灰水にて幾回も洗ふべし、硝子障子は布の軟かなるものを以て拭ふべし決して硝子類を拭ふに紙を以てなすべからず之れ疵を付くる事あればなり甚しく汚れたる硝子はアルコール又は石油を付け磨くべし。

質疑欄



●質問注意 ●質問中診察せざれば應答し難きものは一切解答せず又答解に遲速あるは登載順に都合ある爲めと御承知を乞ふ●質問は端書にても封書にてもよろしけれど單に質問のみなわかりよく認むる事●質問に姓名を出すことを好まざる方は匿名にても差支なきも事務所へは姓名御通知の事●本號の雜誌に登載する分は凡前月十五日迄に申込まれしものとす

質問者　芝　一會員

問　當家にめしつかひ居候下女兩手の上面に疵多

數生じ居候まゝザリチルサン一、〇コロヂーム一〇、〇を混ぜたる水藥一日一回ぬらせ候へども未だに取れず其中大なるものは餘程ひくゝ相成候へども猶あつさの爲めにやうみをもち候もあり誠に可愛相ゆへ何にかよき藥御敎示願上候

答

疣には乳頭形と扁平狀の二種あッて傳染力をもつて居るものもありますから餘り摩擦ッたりするとます〳〵蕃殖して顏などですと一夜の内に一面に蔓延することもあります此療法には電氣分拆術もあり又澤山の疣は「コカイン」と云へる劇藥を塗ッて爬搔術を行ふのもありますが是等は何れも醫者のする事て素人の出來ぬことですが、さしたるひどいのでなくば蜘蛛の巣で括ッて置くがよいだん〳〵に括れて取れてしまいます蜘蛛はどんなのでもよいが俗に女郎蜘蛛といつて大きくて奇麗なのがある其糸がよいコレハ素人の爲し得る至て簡易な療法です。

又疣などは所謂理外の理か俗に云ふ呪ひて治ることがあるコレハ佛蘭西の專門家で「ベンニー」と云ふ人が此事を書物に書たとがある現に某皮膚病專門の博士が記者に話さるゝに、博士が十歳か十一歳の時であつた手の指に疣が出來た、土地での言ひ傳へに盂蘭盆會の時用ゐた苧殼の箸で疣を摘まんで呪ひをすると治るとの事であるから其通りヤッた其呪ひは外でもない苧殼の箸で其疣をつまんでイボ〳〵アッチへ往けと三度やッたのだスルト疣はいつとなく自然と取れ落ちてしまッたコレハ事實だから事實として置かねばならぬと話された例がある丁度初雷の時箒で疣を掃ひ落すといへる俚諺の樣なもので疣などにはコー云ふ奇妙なことで癒ることもあります又疣の澤山のには切除する法もあり硝酸や硫酸などを其頭に塗り腐蝕させて消滅せしむる法もあります又ザルチルサン一グラムにレゾルチン〇、二ワセリン二〇これを常に塗り置くもよい何にせよ疣の根は丁度松の木の根の樣に固くはびこつて居るから俗に云ふ魚の目の樣に容易に引き拔くことは出來ません要するに素人は蜘蛛の巣位てとれぬ樣なものは專問の醫

師にかゝりて治療を受けられねばなりませぬ御申越の處方は俗に申す魚の目の治法に用ゐます尚疣のことは本誌第百三十一號衛生叢談の部參照あれ。

質問者　千葉一會員

問　髮の毛にくせの有るは一の毛の病氣のよし申す人の候へ共治療法のあるものにや

答　ちゞれ毛には二種あッて人種的から來るのと生れてから後偶然或局部丈ちゞれ毛になるのがある後者は適當の治療法で治癒しますが人種的のものは治癒の見込はありません偶然的のものはツマリ毛根營養の不良から來る病ひで營養神經の傷害でありますから先づ之を治癒せしめんには專門家の治療を受けらるゝことは勿論先づ血液循環傷害等を除き專ら滋養食をとり充分に身躰の營養を盛んにすることが必要であります。

因に記　肥滿症の質問に對しては本誌に度々記載したれば前の雜誌をよく御覽ありたし。

神田區の一會員

問　腦貧血と腦充血との原因及救急手當伺上候

答　腦貧血腦充血とも何れも俄かに失神の狀態をなすもので何れも讀んで字の如く腦に血の不足するのと充分に滿ち過ぐるの差違にて過不足ともに不結果の影響を來すもので腦貧血には先づ平臥せしめて衣服を緩るめ冷水を噴きかけアンモニヤの如き嗅劑をかゞしめて失神を招く諸件を避け興奮劑（葡萄酒等）强壯劑等を與へて安靜ならしむべし原因療法としては持長せる出血、子供に餘り永く乳を呑ましむることや下痢等は治癒せしめさるべからず。

腦充血には精神の感動腦をひどく使ふことを止め其原因として心臟病肺氣腫等の病あるものは之を治癒せしめ頭は高く病室は暗くして安靜となし頭部に氷罨法四肢に誘引を施し手足に芥子浴或は熱浴を施し其他有力の下劑灌腸を行ひ或は瀉血を行ふべし。

質問者　山梨縣一會員

問　私事妊娠いたし候當時より俗にシミとかサビとか申すもの顏へ出來誠に見にくゝ候に付或人

に尋ね候處出産後一ケ月程にて全治いたす由申され候へ共最早半ケ年に及び候へども未だ其まゝにて誠に困り居り候よき藥有之候はゞ其方法くわしく御教示願上候

答　是れは生理的の異狀から來たものですから何ケ月に治癒ると定め兼ねますが自然に治癒するもので或人の說の通りです是れは一寸と見るとそばかすに似て黃色或は暗褐色で大抵顏手足頸の如き重もに衣服より被はれざる場所で此特性として夏になれば判然と現はれ冬になれば殆んど消滅するもので西洋にては毛の赤き女に多しと治療法はそばかすと大差なし其他へブラ氏の夏目所得と云ふものあり白降汞、次硝酸蒼鉛、各五、〇ワセリン二〇、〇の合劑あり（醫師より貰ひ受けらるべし）用法は日々數回擦り込み兩三日にして一旦休み又後擦り込まるべし。

●生れたての小兒に出來る靑痣のこと

前號の拾遺

答　生れたての小兒に靑痣のあることは前號の質疑欄に回答して置きましたが尙其拾遺として少しく記しましやうこれにはいろ〳〵の說がある或は胎兒の位置に關係するものでソは母親が熱いものなどを呑んで胃の熱したとき胎兒の之に觸るゝが爲めに起るといひ或は姙娠中ころんだ爲めだとか又は世俗の言ひ傳へに母親が火事を見たとき身體を掻いた爲めだなどゝ何れも根據のない說を立てるものもあるが是は多く背面脊部に出來ることが多い是は所謂動物進化の殘物で（凡そ人間は猿の類から進化したものだと云ふ近世の理屈から其靑痣は猿時代の特徵が殘ッて居るのだといふことゝて）他動的のものでない猿などを調べて見ると身體に其斑痕があるを見ても知れる是を詳細に證據立てるには專門に立ち入らねばならぬ某博士の談に富士川ドクトルもミュンヘンの小兒科外來で歐人にも見懸けたこともあるそうです此事は足立文太郎と云へる人の著書には詳しく書いてあります右の理由ですから初から豫防するとは出來ない乍去此靑痣は多く生長に從ひ自然に消滅するもの

て左樣懸念に及ばぬものです。

問．ビール及ラムネ及日本酒等の良否を見分ける容易な方法御敎へ被下たし

質問者　在大阪一會員

答　ビールは透明にして濁りなきものにて酸味や不快の臭味があつたり醱酵の不完全即ちよく泡立たゝぬものなどは用ゐてはなりませぬ其混濁を知るには無色の硝子罎に入れ白き壁若くは日光に向ふて側面から之を透視すべし浮游物の如きも斯くすれば直ちに知ることを得麥酒の口をあけたるものは成るべく時を移さず用ゐ飲み殘りなど貯へ置くべからず短時間なるときは栓を固くして水中に倒しまに入れ置くもよろしけれど是れは衞生上好ましからぬことなり。

ラムネの如きも溷濁沈澱等は此法により試驗せらるべし但しラムネ飲用の時市中の瓶詰になりおるものは其容器の封緘の紙に記した製造年月日を見るのが緊要です徃き製造のものは不良のものが多いのです。

酒の試驗法　防腐劑としてザリチル酸を法定以外多量に混入するものあり其飲用の際稍や甘味を覺ゆるものは「ザリチール」酸の入りあるものにして此等の淸酒には過格魯兒鐵液を注加がすべしザルチール酸の入りたるものは微紫色又は紫色を表はすものなり但し法律には防腐藥として「サリチール」酸を混入することは酒一石に付僅か十匁にして此以上を超過するを得ざる規定なるが夏分になると殊に甚だしくザルチール酸を混入する奸商あり昇汞存在の檢査法もあれど是れは素人には面倒なれば略す。

質問者　伊豆　すゝ子

問　一、蠅は傳染病を媒介するものと聞き及候へ共蠅を驅除する能き藥又良き方法御座候はゝ御敎示下され度候

問　二、蕺(ドクダミ)の煎劑が子供の遺尿に偉効ある由聞き及候へども右事實に候や其用量と用法御敎へ被下度候

一、答　蠅は實に傳染病の媒介を爲すものなれば其驅除法研究は實に必要の事なり殊に近傍に傳染病などの發生しました時などは膳部食物などに止らぬ樣嚴重の注意を要しますさりとて蠅は蚊の樣に燻しをして退散させる譯にも行かず何にか蠅の來なくなる樣な藥でも發見しましたらサゾよい事でしやうマダ見當りません先づ普通の驅除法としては御承知の通り酢を入れた瓶で捕へるのと又は打ち敲きて殺すかですが打ち敲くにも除りひどく敲くと臓腑などが出て危險です勿論其疊や板の間は消毒せねばなりません但し是等の驅除法は一時止むを得ざる姑息的の手段でコンでは所謂拂へば來る夏の蠅で拂ッても〳〵も又來ますから寧ろ根底より驅除する法を取るより致しかたがありません夫れには己の家の周圍は勿論近所合壁の會議により不潔物は燒却するとか又は充分消毒する樣にし馬小屋などある家には殊に注意して清潔法を行ひ先づ初めに蠅を悉く撲殺し蠅の卵の孵化せぬ樣に生石灰等を充分に撒布して消毒しましたならば蠅は必らず根本より消滅せしむることが出來ようと思ひます蚊にしてもそうです矢張り溝渠などの流通をよくし總て不潔の場所を清潔にしますときは蚊の發生することが出來ませぬ譯です併し此法は隨分困難の事ですが是より外に良法はまだ知りませぬ。

二、答　蕺の小供の遺尿に偉効あることは知りませぬ本草綱目には蕺小毒あり小兒之を食へば足痛を來すとありますから飲用せぬがよい一體小兒の遺尿は病氣から來るのも習慣から來るのもある習慣から來るものは充分訓戒を加へ就寢の前は飲料物を減じ夜中屢〻呼び起して便所に往かしめて習慣を造くるがよい夫れでも止まねば病氣なので其原因としては身體虛弱榮養不良とか膀胱の知覺が過敏で括約筋の充分にしめる力に乏しきより來るもので是れには冷水洗拭及坐浴を行ひ尿意の頻りに來るものには溫浴をなさしめ虛弱の小兒には規尼涅、鐵劑を與ふべし直腸に電氣をかくるも尤も有効です又臭素加里と臭素

アンモニユーム剤各二、五を水一〇〇ガラム此一食ヒを牛乳に溶かし砂糖を加へて用ゐるもよし尚蕺の代りに大黄の薬を煎じて呑ますも又効能あるべし小見科大家のホイブネル氏の處法にも大黄チンキを用ゐた事が書いてあります。

質問者　愛媛　一會員

問　牛乳の性分簡易検査法御敎示願上候

答　牛乳の檢査法は隨分複雜して居りますから今素人方の參考までに申上げましやう一體牛乳の性狀は白色或は淡黄色の不透明な較ゝ濃き液體で一種の香ひがありまして少しく甘味があります市場乳即ち數頭の牛より搾り取りましたものは少しく酸性を帶ぶるもの多く其組成分は左の通りです。

脂肪、乾酪素、アルブーミン、乳糖、灰分

檢査法も種々ありますが比重及脂肪量等は素人に少しく面倒です檢乳計にもいろ／＼ありますが「フエーゼル」氏の檢乳計は先づ簡便なものです。

腐敗の試驗法　牛乳は中性なるものをよしとしてありますから若し牛乳中に試驗紙（藥屋にあり）を入れ見まして色が變らねば差支へなきものですが若し其赤色試驗紙が青き色に變じましたときは之を亞爾加里性の反應と申して脂肪の多量を示したもので赤色試驗紙が青き色に變じましたときは之を酸性反應と申して其腐敗を示したものであります甚だしきものにありては乳汁が凝つてドロ／＼する樣になります是れは一見してよくわかるのです。

牛乳には不正手段として種々なことをするものが多い水を混ぜ又は脂肪を拔き取り殘り汁を混じ米の磨ぎ汁を混じ防腐の爲めにいろ／＼の藥品などを用ゐるものがあります是等は充分に注意せねばなりません現今盛んに行はるゝ藥品は

ザリチール酸、フオルマリン、硼酸、炭酸曹達、重炭酸曹達等です（炭酸曹達と重曹は腐敗したものを所謂ごまかさん爲めに用ゆ）

ザリチール酸の檢出法　牛乳十立方センチメートルを取り之に「過格魯兒鐵液」を加へましたとき紫色になりましたものはザルチール酸の入りある證據で

す。

フォルマリンの檢出法　是も前と同量を取り之れに「フロログルチン」溶液二乃至三立方センチメートル及び「ナトロン」滷液五乃至十滴をたらして之を振り動かすときは「フォルマリン」の入りあるものは赤色を呈します。

硼酸の驗出法　牛乳五十立方センチメートルを取り之れに石灰乳を加へよく乾して灰の樣になりたるもの少許の鹽酸を加へ其液に薑黄紙を浸すとき硼酸の入りあるものは赤色を呈し又アンモニヤ瓦斯に觸るれば藍色に變じます。

炭酸曹達及重曹の檢出法　アルコール十立方センチメートル及「ロゾール」酸溶液一立方センチメートルの中へ牛乳十立方センチメートルを加へたるとき赤色を呈するときは右二藥の内何れか入りたるの證なり。

米の泔汁の入りたるを檢出する法　之れは牛乳十立方センチメートルを煮沸して冷却したる後沃度丁幾を滴らし込むべし藍色を呈するものは泔汁の入りたるものなり。

生乳と一度煮沸したる乳との鑑別法　少許の牛乳に癒瘡木脂丁幾を加へれば新らしき牛乳なれば藍色となり然らざるものは着色せざるものなり。

●臺灣臺北の一會員へ

答　肺病の初期にて御入院後退院を許可せられ通院せらるとすればこれよりは空氣のよい處を撰び營養を盛んにして尚是迄の醫師の命に從ひ加養せらるべし特に「クレオソート」を服用するに及ばす醫士が必用があれば飲みよきようにして投藥して居りましやうから安心して治療を受けられたし。

質問者　日本橋一會員

問　私事はなの上より兩わきにかけ黑く穴あきしようになり居りますがあぶらですか昨年十月發行第百六十七號の梅子さんの御問ひのせつの左のにきびの療法にてよろしきや

答　此にきびの事は本誌第百二十七號の衛生叢談及

第百六十七號の梅子さんの問ひ及第百六十九號同氏の質疑等御參照ありたし。

尚殘りの質問は此次ぎに。

長野縣下高井郡一會員へ

肋膜及腹膜にて御惱みのよし御察し申上候コレハ適當の病院にても早く入院なされて手後れなく治療を乞はるべし決して輕い病氣ではありませぬ全治の妙法との事なるも夫れは病院に往かれるのが一番です。

●高崎市の一會員へ

答　赤十字社病院看護婦入學試驗に關することと及篤志看護婦規則等は一兩年前本誌にて掲載したことがありますが規則は永くなツて餘白をつぶしますからドーか御調べ願ひます。

●茨城の一會員へ

答　御申越の病狀にては腸胃病專門の醫師に就て診斷を乞はれたし病氣は種々なる複雑の關係がありますから迚も診察の上ならでは確答は出來ませぬ御出京が出來ますなら大學病院へなり胃腸病院で診斷を受けられては如何や。

中外彙報

▲皇后陛下の御懿德　此程當局の有司は皇后陛下に拜謁の所酷暑にも拘はらず御避暑の行啓もあらせ給はざるは恐れ多き次第なる旨言上せしに陛下には酷暑に加ふるに困苦と缺乏を意とせずして大敵と戰ひつゝある兵士或は狹隘にして不便勝なる病院に收容され居る傷病者及之れが治療看護に從事しつゝある者等を思はゞ昨今の炎熱も何の物かは女官等の如きも繃帶材料の製造を以て無上の冷涼劑と稱し居たるが如きは滿足の至りなり此際望むところは看護婦人等がますゝゝ名譽なる職務を完ふし尚愛國婦人會の如き團体の役員等が愈々共同的遂行に盡力せんことと御言葉を賜はりし御懿德の程こそ有難き

▲衛生長官の謝狀　篤志婦人會にては曩きに陸軍衛生材料廠長より出征軍人携帶小包繃帶三万個の調

製を囑托されしも此程悉皆上納したるに小池衛生長官より鍋島同會長に謝狀を送り尚更に該綳帶四萬個の調製方を囑托されしといふ。

▲日本赤十字總裁宮の慰問　閑院宮載仁親王殿下には去七日午前八時より東京豫備病院及澁谷分院に臺臨あらせられ親しく傷病兵を御慰問あらせられしといふ。

▲日露兩軍の衛生事業　近着の倫敦新聞ランセットは兩軍の衛生事業を批評し露國は軍事衛生に莫大なる準備を爲したりといふに拘はらず去る六月十九日及翌二十日の兩日三千五百人の露兵負傷者が哈爾賓に輸送せらるゝの際之れが手當をなす材料一として備はざることなし日本軍は婦人は上下の別なく赤十字社の業に盡瘁し醫師は數多く從軍して傷病兵を療し衛生上の手拔けなきは外國人一同の嘆賞する所ならずや云々。

▲寄生蟲病原の發見　岡山醫學專門學校敎授醫學博士桂田富士郎氏は山梨廣島佐賀三縣下に於ける一種の寄生蟲病の病原を發見して其報告を公にせるが同病は右三縣に於ける地方病にして肝臟及脾臟增大、食慾亢進、下痢且は下血、全身貧血及榮養不良、腹水及び浮腫等の諸症候を以て固有とする一種特異の疾病にして三縣下のみならず各地にも絕無とは斷言し難きものなりといふ。

▲征露丸　陸軍衛生材料廠にては題名の如き傳染病豫防藥を製造して戰地に送る事となり此事業は軍人家族の職を求むる人々に對して頗る有益の仕事で此仕事は只煉藥を丸るめて鑵に詰める容易な業なりと賃錢は普通十六錢なるも熟練すれば二十錢は優に働き得べく一日の就業時間は七時間半にして作業の時は白衣白帽の作業服を纏ひ丁度看護婦の服裝をなして夫れ〳〵の仕事にかゝるものなり第一回の募集に百四十名を得たるが戰局の擴がると同時に尙多數の募集をなすべしといふ。

●米國國立肺結核發生園の好果

（七月刊行米國評論ノ評論所載オリバーニウマン稿國益新聞所載）

▲肺結核は救治病　著者結核に罹れるもの多く皆な死せんことを期

せしが今や然らず殊に近かく北米合衆國の西部は西南部にある養生園にて種々試驗せしところによれば既に第三期に入れる肺結核患者と雖ども又治療せらるゝを得るものにして現に同國スタントンなる海員肺結核養生園附の醫師カーリンドン氏の如きは同所附に任ぜられし際は肺結核第一期にありしが同地に在ること二年にして全く癒え至極健全なるものとなれり このスタントン海員肺結核養生園は官立として政府は之が爲に多大の經費を支出し患者は皆な施療にかゝり大藏省の管轄に屬するものなり 同園には海軍以内の船員にして救護を待つべき肺結核患者を收容し不幸なる海員を保護すると共に結核菌の流布を豫防し其傳染を防ぐなり

▲其治療法　スタントン養生園にての結核患者治療法なるものは其病根を絶たんとするに非ずして其患者の身體の健康を回復せんと力むるにあり 乃ち同園附の醫師は主として天然力を借りて患者の體力を養ひ自ら病根を絶滅するに鋭意す 而してこの目的を遂せんとするに最も必要なるは

（一）休　息
（二）戸外生活
（三）瓦　食

の三者にあり 肺結核は有らゆる疾病中最も身體の組織を害したゞに肺部を腐蝕せしむるのみならず活力を喪失せしむること甚しきものなるを以て休息により殘餘の活力を可成消費せずして之を疾病の制抑に用ひざるべからず 其食物は競技運動を試みんとする者の用ゆる如く淡泊にして完全に調理せられたる滋養に富む纖維質のものを用ひざるべからず 殊に鷄卵と牛乳とは非常に効用顯著なるを以てスタントン養生園にては多量に之に用ふ 又同園にては殊に戸外生活に重きを置き患者中の約半數は夜中と雖も天幕に眠り其將に悉く窓を開放し換氣法の設備充分せる舍内に眠むるものと雖も睡眠時間中にあらざればこれに入るを容さず 日中は總て皆戸外に出て居らしむ 殊に同地は一年三百六十五日中約三百四十日は晴天にして而も四季共に溫暖の氣候なるを以て此種の生活に適す 又睡眠に身体の組織を養ふ効著きものなれば充分に之を取らしむ

▲遊戲と讀書　患者の心を慰さんが爲め宜く遊戲の法を立つべしとは何人も考ふるところなれども遊戲中多く活力を徒費し又患者の体温を昇らしむるものなれば一概に贊斷すべきものに非ず 故にスタントン養生園にては患者の理想によりて之を許可しコロック或は棋杵の遊戲を爲さしむ 又赤十字ギルドの合讚及其他の好意により古今文學の料を聚めたる圖書館の設備あり 雜誌新聞紙等をも合せ患者に借覽を容すと雖も一切戸外に於てするに非んば之を閲讀せしめず 圖書館の周圍には設き椽ありて茲に安樂椅子を備え患者は即之に倚りて讀書す 冬期中は時に小音樂會を開き春、夏、秋の三季中は患者をして附近の山間に單日旅行を試ましむるも總て活力徒費する如き遊戲は容易に之を許さず されば迚て運動の不足は運動の過度よりも更に其害多く患者の健康を回復する邪魔となり病勢を助し遂に死を招く如き恐れあるを以て或る者には乘馬を勸め或者は草刈園藝等のことに當らしむ 此様の運動は肺量を增大し又同養生園に入りて一二ヶ月なれば患者は概ね肺量を增すこと三四吋なり 又海面或は低地に於て喀血せる者も同國に收容せらるれば多くは喀血せず醫師の説によれば是れスタントンの地ゴク海拔六千百五十呎にして大氣壓の低減せるものあるが爲めなるべしと

▲消毒設備　スタントン肺結核養生園の管理者は病菌の既に快癒し肚快癒るゝに向へる患者を再侵せんことは恐れ有らゆる豫防法と消毒法とを講じ種々なる噴壺を交附して地面に淡唾するを禁じこれに溜りし淡唾は嚴重に消毒せられ第一期患者は決して第二期第三期患者と共にせず 又第二期患者と第三期患者は之を區別すること甚だ困難なるを以て之を共棲せむ 尤も初期に入園せるものほど其回復甚だ容易なれどもこの養生園に於ける特別療法は第二期第三期に入れる肺結核患者を快癒せしむる割合甚だ多く今や醫學社會を感歎せしめつつありと

▲當意即妙の療法　萬朝報に曰く過日伊皿子伊藤某の長女三歳なるが過つて五厘銅貨一枚を嚥下し切り

に苦悶し始めたるより兩親の愕き一方ならず直ちに同區松坂町の醫師野畑氏方に伴れ行き治療を請ひたるに野畑醫師は切餅二片に砂糖をつけて食はせ明朝までには必ど便通すべき故心配するに及ばずとの事に兩親は危ぶみ乍ら待居るうち果して野畑の言の如く銅貨は翌朝餅に裹まりて下り大手術を受くるの難を免れたりと云ふ注意すべきことにこそ。

▲紫鉛筆使用禁止訓令　文部大臣は去九日の官報を以て左の訓令を發せり。

學生生徒等の使用するコピール、ピオンツト、リー、ピオンツト、ヨハンコピール、ハフエ、コピル等の記號ある紫色鉛筆は其の製造の原料に有害の色素を包含するが故に其の端片又は溶液の眼中に入る時は激烈なる毒作用を呈し終に不治の眼疾に陷る事あり依て幼稚園及小學校等の兒童には之が使用を禁止し其の他學校生徒に在りては必要缺く可からざる塲合に限り之を使用せしむる事を得と雖も其の使用上の周密の注意を爲さしむべし。

▲本年の傳染病　本夏は赤痢腸窒扶斯は非常に流行となり疫痢も亦益々蔓り寒心に堪へざるなり駒込病院の如きは收容患者二百三十餘名の多きに達して滿員となり廣尾病院も七十五名にて是も滿員なれば去九日より更に本所病院を廣尾病院の分院として開き補足に充てしも尚不足の模樣あるより去る十九日より大久保病院を又々廣尾病院の分院として臨時開院するに至りしといふ但し從來自宅療養を許し止むを得ざるものを市立病院に收容せしが本年は成るべく自宅療養を許さゞる方針なりしかば一はかく病院に不足を生ずるなるべけれど又病勢の猖獗を知るべきなり今後涼氣を催すに從ひ益々蔓延すべければ飲料水には充分に注意して禍を未然に防がざるべからず。

▲郡部の赤痢　東京市内の傳染病は例年に比し非常に增加を示しつゝあるが又郡部にも著るしく增加を見るに至り中にも南多摩郡堺村の如きは全村已に數十名の赤痢其他の傳染病を出し全村擧ッて之れが豫

防に盡力中なりといふ。

▲氷の害　腸胃を害し歯牙及び脳も害し殊に慣れぬ人が氷を喫するとヂキ下痢を起す小兒の如きは勿論禁物なり氷屋などにあるいろ／＼の稱物例へば氷あづき、氷しるこ、氷白玉、氷あんず是等は何れも不消化物で小豆の如きは腐敗し易きものなれども氷の中に入るゝときは冷却するので容易に腐敗を見出すことが出來ず一層危險なれば是等は成るべく食はざるをよしとす。

▲仁川福州の流行病　福州並に仁川に於ける傳染病狀况に關し在同地帝國領事より本月六日發を以て左記の通電報ありたり。

本年は近年稀なる氣候不順六月以來今に至るまで雨天勝七月初旬より黑死病虎列剌劇烈福州城内外各市街にて死亡者毎日百名以上ならんとの事なりしが昨今は稍減少し毎日の死亡者五六十名なりと云ふ(以上福州領事發)

當港在留本邦人男一名本日虎列拉擬似病に罹り治療中原因不明目下嚴重取調中

▲戰時衛生　戰時衛生に關し内務省衛生局長窪田靜太郎氏は曰く日露開戰以來廣島、門司其他各要港に於ける衛生に就いては清潔法を施行し傳染病豫防法を勵行せしかば出征軍人に對し惡疫感染の憂ひなく殊に喜ぶべき現象と云ふべきは目下出征軍人の歸京に際しても健康診察は未だ軍人の惡疫感染者を出さゞりし事なり云々猶ほ衛生局長は戰後衛生に就き目下赤痢ペスト等の豫防法調査中なりといふ

▲豫備病院の慰問日割　東京豫備病院にては慰問者は日々に夥しく爲めに患者の診察手術等に尠からざる差支を生ずるのみならず患者の適宜運動にも妨げあるを以て今回左の如く慰問の日割を定めたり。

東京豫備病院　毎週火曜及木曜自午前一時至同四時
同澁谷分院　毎週水曜及金曜自午後一時至同四時
同戸山分院　毎週月曜及木曜自午後一時至同四時

▲赤痢と戸口調査　昨今市内各區に赤痢、下痢、疫痢の患者發生し貧民窟の如きは特に續發の傾向を呈せるより警視廳に於ては管内各警察署に通牒し檢病的戸口調査を施行し之が豫防を爲さしむる筈なりと。

▲百ケ所の井戸を閉づ　東京淺草は今回腸窒扶斯猖獗を極め患者五十七名の發生を見るに至りしを以て淺草田町一丁目二丁目の堀井戸百ケ所に蓋をなし供用水道の外一切使用を禁じ又々大掃除を勵行すべし

といふ。

▲旗艦三笠の衛生狀況　旗艦三笠の軍醫長草野軍醫中監の衛生報告中昨三十六年(平時)と本年(戰時)との患者比較表を載するあり同艦は於ける健康狀況の如何に善良なるかを推知するに足る。

軍艦三笠平戰時患者比較表

月	人員延數每百患者數	月	人員延數每百患者數
三十六年			
二月	一、四八	三月	一、九五
四月	二、五九	五月	一、一一
六月	一、四四		
三十七年	同上		
二月	〇、八二	三月	〇、六四
四月	〇、四二	五月	〇、二八
六月	〇、七八		

▲臺灣のペスト概數　臺灣に於ける本年七月二十五日より同三十一日に至る一週間内のペスト患者數は臺北廳四、死者三、鹽水港死者一、臺南廳患者十、死者十三にして初發以來の累計患者四千百十死者三千〇十五なりと而して昨今稍猖獗を極め居れりと。

▲東京豫備病院の傷病兵　東京なる陸軍豫備病院に在る傷病兵の數を聞くに本院の分は將校八名、下士以下四百五十五名(内重症三十五名)澁谷分院の分は將校四十一名、下士以下千五百七十五名、戶山分院の分は下士以下三百二名、湯河原に在る者將校十一名、下士以下三百六十四名、合計將校六十名、下士以下二千六百九十六名、總計二千七百五十六名にて此内戰傷者は千三百十五名、其他の負傷者百四十七名なりと以上の患者の內にて近々の內湯河原へ轉地療養に送らるゝ者は三十名內外なりと云へり。

▲傳染病の注意　傳染病は昨年の今日に比すれば實に七百四十餘名を超過し赤痢及腸窒扶斯尤も多く加之小兒間疫痢といへる一種の病各所に續發し死亡するもの少からず本病は多くは長時間頭腦を炎天に曝らし又は不良飲食物により發病するものなれば兒童外出の際は必らず帽子を被らしめ不良の水若くは不熟の果物を禁じ長時間又は濁り水内の游泳を禁ずべし。

▲本年の赤痢病　本年一月以降七月末日に至る全國赤痢患者總數は四千〇二十一人にして死亡六百三十

五人にして尚蔓延の兆候あり東京附近にては小松川近在國府臺附近に多く發生し山梨縣九州地方長崎大分四國の徳島縣等は何れも昨年よりも患者の發生多く東北地方にも宮城秋田の兩縣も又昨年より多かるべき見込にて殊に水害を被むれる地方は尤も油斷のならぬことなり例年の統計によれば八月頃迄は東北地方は九州地方に比し少なけれど九月頃に至れば非常に多數に上るを通例とすれば全地方は殊に周到の注意を要すべきなり今最近三ケ年全國赤痢患者の統計を擧ぐれば左の如し。

	患者	死亡
卅四年	四九、六三四	一〇、八八九
卅五年	三六、九八五	八、四四二
卅六年	三〇、三二〇	七、二〇九

▲マクレーン孃　日本水兵の母として有名なる仝孃は大の日本好きにて我水兵の如き渡英の際は非常の歡待を受け海軍にては誰知らぬもののなき孃は先頃より再び日本に來らんとせしが病氣に罹りポーツマウスにて療養の處昨今は危篤なりとの報ありたれば我鎭守府下士卒集會所より醵集せる金五十ポンドを取り敢へず病氣見舞として贈與せしといふ。

▲日本花柳病豫防會　今回東京帝國大學醫科大學皮膚病科教室内に設け大に花柳病の制遏を圖らんとす其主意左の如し。

日本花柳病豫防會を興すの檄

花柳病は結核と酒狂とを併せて晩近文明人民の三大勁敵と稱せらるゝものにして、殊に繁華の都會にありて、人民の聚合其度を増すに從ひその危害の加はることは實に吾人の豫想の外に在りとす。彼の虎列刺、ペストの如き、峻烈の傳染病にありては病毒猛烈にして家ごとに病み戸ごとに斃れ百柩丘に累み[illegible]狀ありて人の之を恐るゝや蛇蝎よりも甚し。而かも[illegible]密にしてこれに直接する者に止まり、今日吾人の知識を以てすれば之を防ぐに[illegible]道なからんや。縱令、常識なきの人民はこれに措意せず從て或は危險に近づくこと無しとせざるも[illegible]人は其害毒の恐るべきを知り自ら注意して[illegible]これに傳染するの機會は甚稀なり。[illegible]

凡そ花柳病が個人の健康を傷害するとの悲しむべきは固より論なし、[illegible]

已むを得ざる者年々歳々果して幾許ぞや。試みに明治三十五年陸軍選兵成績に徵するに檢丁千人中三、二一人は實に黴毒患者たるを見るなり。

嗚呼花柳病の蔓延せること、是の如く廣く、其害毒の險惡なること是の如く大なり、而して道義的及び社會的の威力を用ゐて是等病患を根帶より芟除することは到底今日吾人の能くする所にあらずと雖も、その程度を減少しその危險を豫防することは吾人の知識之をなすに難からず、此目的につきて手を下すべき範圍は決して狹少にあらざるなり。況や組織の完全なる文明の社會は、適當の方法を設けて以て其分子をして現時並に將來に、かゝる險惡なる疾病の危害を避けしむるの義務あるに於てをや。是に於てか、花柳病豫防を講ずるの必要を生ぜり。而して從來は其職に在りし者のみ其必要を認め、之を唱道するの人士も醫家及び衞生學者に過ぎざりしが一千八百九十九年白耳義國首府ブリュッセルに萬國花柳病豫防會議の開設せられしより花柳病の豫防は天下公衆の注目する所となり佛國衞生及道德豫防會 Société française de Prophylaxie sanitaire et morale 先づ成りて獨逸花柳病撲滅協會 Deutsche Gesellschaft zur Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten 踵て起り、近時嗹馬及び伊太利の諸國に於ても亦同一の企圖ありといふ。共に是れブリュッセルに於ける萬國會議の決議の主旨に基づき、相呼應して以て花柳病の豫防撲滅を劃策せんとするものなり。

退て我邦の現狀を顧みるに、花柳病の蔓延は歐洲諸邦に比して寧ろ優るあるも決して劣れりとは謂ふべからず、隨て其危險を豫防するの急なること一層切なるものありて存す。是に於てか我政府は曩に委員をブリュッセル會議に派し泰西の諸家と共に花柳病豫防の策を立てしむ。而も這般の事業、獨り之を政府の手に委すべからざるや固より論なし。日本花柳病豫防會の興れるもの畢竟之がためのみ。

今や我國は前古未曾有の時局に遭遇し、精鋭なる陸海軍人と健全なる國民との力により永遠の勝利を我に收めざるべからざるに際し、熟ら花柳病蔓延の狀勢を視れば殊に寒心堪へざるものあり。幸に世の君子淑女の熱誠なる賛助と忠實なる斡旋とにより克く本會の目的を達することを得むことを、人道のため國家のため某等の切に希望する所なり。(規則は次號)

▲種痘未滿の入學拒絕　近頃米國カリフォルニヤ州に一種異風の訴訟ありソは佛國人の某子女を某學校に入學せしめんとして種痘未滿の故を以て拒絕され控訴迄なし爭ひしも學校長の一般の種痘を奬勵する所置として決して憲法違反に非ざることを申渡されたりといふ。

▲肺結核の猖獗　本年一月以來六月に至る六ヶ月間に於ける東京市內の死亡者は總計一萬七千七百〇七人にして昨年に比して三千百十七人の增加なり其內肺結核病者最も多くして三千二百六十八人を占め居れりと。

▲體操學校女子部　女子體育の必要は漸く世人の注目する所となり來りしが、今回日本體育會體操學校女子部に於ては過般第二回卒業生を出し、來九月より更に第三期生として普通科(一ヶ年卒業)三十名高等科(一ヶ年半)三十名撰科若干名を募集する由、前者は無試驗檢定を以て小學校同科教師たるの資格を得べく、中者は高等女學校程度の同科教員たる實力を養成せしむべく、後者は一般運動療法的體育を課するに在り、而して其擔當教師は高島平三郎、川地

三郎、宮田修、(以上學科)小野泉太郎、井口アグリ、高見澤宗藏、小澤卯之助、石橋藏五郎の諸氏なりと、因に記す同部教授は毎日午後三時よりなりと云へば、他の學校へ通學するものなどには頗る便なりと云ふべし。

●出征軍人家族慰問婦人會の慰問

仝會貴婦人諸氏の熱心なる盡力によります／＼盛會となり着々活動を初められ過日仝會理事の人々は左の通手分して傷病兵を慰問せり。

四日（麹町、東京豫備病院）在院軍人五百餘名
公爵夫人鍋島榮子　侯爵夫人大山捨松　下田歌子　男爵夫人松平須賀子　日下浩子　高木富子　岸　淸子　ミセス、ウード　珍田岩子　青山待子

五日（澁谷分院）在院軍人千四百餘名
公爵母堂毛利安子　山脇房子　安部俊子　男爵夫人千家俊子　男爵夫人三井苞子　三井五十子　岡田鉦子　門野駿子　若宮米子

六日（戸山分院）在院軍人三百餘名
侯爵夫人黑田清子　高木鐵子　濱尾作子　穗積歌子　三井捨子　下田歌子

尚右慰問の際土産として將校には御國の光（戰爭晝帖）一冊づゝを下士以下には征露紀念(同上)及び和歌を染め拔きたる手拭一筋づゝを贈りたり。

▲横井特別賛助員の轉任　横井軍醫には當分第一師團軍醫部高級部員拜命の爲め仝夫人昇子の君にも是迄支會會計幹事として熱心に盡力せられしが右に付其事務を相川氏に讓り暫く仝家移轉の事に決せられしといふ。



大日本婦人衞生會記事

●高崎支會の傷病者慰問

大日本婦人衞生會高崎支會副會長星野夫人、幹事横井夫人、特別賛助員土谷醫士等の諸氏十數名並に前橋篤志看護婦人會長吉見夫人を始め九名の人々は去月廿六日在東京の傷病者慰問のため同地の一番滊車に搭じ相携えて上京されたり、滊車の上野停車場に着するや本會よりは事務員兩三名出迎をなし適く上京中なりし横井一等軍醫も亦來りて一行を迎へ、相伴ふて飯田町の本會事務所に抵り暫時休憩して茶菓の饗應ありたる後直ちに東京豫備病院に到り

しに吉井軍醫正を首め各醫員等は非常の好意を以て之を迎へ且つ鄭重なる挨拶あり其先導に依りて順次に各病室を一巡し夫れ〳〵慰問の意を致されたり、特に高崎なる歩兵第十五聯隊及び群馬長野埼玉縣出身の傷病兵に對しては一層の熱情を以て厚く慰問の言を交されしに事務員看護婦諸氏は病床日誌を出して細かに傷病の經過を語られ各兵士の欣喜せる狀は眉宇の間にあらはれ中には感極つて落涙せしものさへ有り、孰れも詞を厚うして遠來の勞を謝されたり、轉じて澁谷の分院に抵りしに是亦た歡待歡迎を得應接所に於て暫時休憩、時正に正午に當りしを以て晝餐の後全院には千百餘名の傷病兵を收容しあるを以て一行は三組に分れて叮嚀に慰問する所ありたるに婦人團體にて遠來斯る好舉に出でたるものは誠に稀れなるとて傷病者は勿論各事務員諸氏も大に滿足の意を表され、折柄全院に於て篤志看護婦として小包繃帶の製造に鞅掌されつゝありし我婦人衛生會々長鍋島侯爵夫人其他の各貴婦人等も出てゝ面接せられ懇切なる挨拶ありたるのみならず繃帶卷の作業所を一覧せしめられたり、斯くて一行は充分の慰問と充分の喜悦とを得、午後三時を過ぐる頃、全院を辭し去り思ひ〳〵に歸途に就くことゝしたるが尙歸路本會事務所員の案内にて九段なる遊就館を縱覽せられしもあり終りて再び事務所に小憩懇談の後各く歸縣せられたり。

因に記す同支會よりは慰問として磯部煎餅を夫れ〳〵傷病者に呈出せしが時により謝絶せらるゝこともあれど其送品の傷病者に適當なるものなりしかば快よく受納せられしは一行の大に滿足する處なりき。

終に臨み當日非常に斡旋の勞を取られし橋井軍醫及土谷丕次兩氏の勞は深く謝する處なり。

七月の例會

七月三日(日曜日)午後二時高崎高等小學校に於て第二十三例會を開く第一席橋井講師「戰傷の話」といふ演題にて戰線に於ける創傷の種類名稱より銃創丸

の性質を從來のものと比較し且つ彼我の比較其結果傷病者の治療日數を減ずる而已ならず治療者の%數の外き事（治療術の進歩もあり）を說て杞憂者を安心せしめられたり第二席湯淺講師登壇「赤痢病に就て」と云ふ演題にて該病毒所在發生の時期及該病理の概畧豫防等懇切說明せられたり第三席津久井講師「產前產後の注意」と云ふ題にて妊娠中の攝生より說き及ぼし產蓐熱の西洋に多くして我國に少きは西洋にては產婆濫りに內診又は器械を仕用する等詳細說明せられたり次は星野副會長の紹介にて南山名譽の負傷者三澤中尉の夫人には今回良人東京轉隊に付き告別の挨拶あり次に幹事相川すが子には當支會出征軍人に對する犒軍事項の今日迄の報告及び將來の希望を熱心に述べられたり時針器四時半頃に閉會を告ぐ

連日の快晴にて此日最も炎熱甚だしかりしにも係わらず出席會員非常に多く役員の出席者は左の諸氏なり

星野　相川　千田　鈴木
相澤　齋藤　高草木　三橋　松本
秀島　稻垣

八月例會

八月七日（日曜日）第二十四例會高崎高等小學校內に開く午後二時開會第一席產科婦人科專門醫乾宗太郎君「雜患」と云ふ演題にて一女子耳垢堆積の爲め拾六年間種々なる神經症狀に苦惱然るに耳垢除去せしに數年間の疾病治癒せし實驗說次は癇癖の實驗說該癇癖は年齡は十五歲以上四十歲の人に多く五十歲以上稀なり原因は結核性肋膜炎に多き實驗に就き例の雄辯を振われたり第二席眼科專門醫高草木又吉郎君「眼鏡」と云ふ演題にて其眼鏡の種類即ち凹、凸、圓柱鏡等に就き眼鏡仕用者の注意眼鏡亂用の爲眼に及ぼす害多大なり故に眼鏡を仕用せんと欲せは必ず專門家に就き眼の檢査を請け而して後ち適當の眼鏡を購求仕用するの注意を懇々述べられたり暫時休憩中當第十五聯隊陸軍曆工菅井勝藏君には自家考案の

蒸氣消毒釜の寫眞を携帶其構造及仕用法を說明せられたり第三席産科婦人科專門醫吉田肅橘君「淸潔法」と云ふ演題にて其淸潔法の種類多し然れども各自の胸中に細菌學的思想なければ淸潔法の効果望み難し如何となれば徃々形式に流るゝの恐れあり故に淸潔の効果を見んと欲せば宜布此點に注意實行あらんとを望む云々懇篤演說せられたり第四席眼科專門醫小林春造君「近視豫防に就て」と云ふ演題にて近視の輕忽に看過すべからざる所以男子に付き一例せば日本の兵は眼鏡を用ふると能はず故に近視は兵隊には不合格なり豫防の一二を擧れば薄暗き處にて讀書裁縫等避けざるべからず又は頭を垂れて長くすると惡し之れ頸部脉管を壓迫して腦に充血し爲に近視に罹り易し是又避けざるを得ず彼の學校に於て一時間中十五分間校外に出し新鮮の空氣を吸入し綠 死 物等を見せしむるは其豫防の一なり云々懇篤演說せらる次は本會特別賛成員橫井一等軍醫の夫人には今回良人東京に轉隊に付き告別の挨拶あり次に幹事相川すか子には當支會出征軍人に對する犒軍事項前會の續き例に依て例の如く熱心に述べられたり時針器四時半爲に閉會を告く

此日炎熱最も甚だしく寒暖計九十三四度に達せしにも係はらず出席會員非常に多く役員の出席者は左の諸氏なり

橫井　相川　三橋　相澤　星野
稻垣　關

新潟支會報告

七月例會

七月六日午後一時より當市西堀通長善寺に於て通常會開催し左の講話ありたり出席者廿五名

一　幼兒衛生談　講師　工藤秀一郎君
一　音樂練習　合唱歌　同　青木たけ子君

米澤支會報告

七月例會

七月十日第二日曜日午後一時高等學校内に於て例會

を開く開會の順序左の如し

一 齒の衛生 關新太郎君
二 日本歴史上婦人の性格に就ての時局談 戸澤又太郎君
三 子宮出血時の救急處置に就て 猪股松三郎君
四 近視眼の話 加藤殿三郎君

右講話終りて四時散會せり

弔詞

新潟支會講師 中村勇三郎君には去月九日急性病の爲め夭折せられたり本會は氏の平素支會の爲め盡されし高義を追想して哀悼の至情に堪へざるなり

私立大日本婦人衛生會

●本會入會者

○千葉加藤やす子紹介
●神田區表神保町一番地 通常會員 森いち子

○高崎支會より轉入
●四谷區永住町三番地島瀬氏方 通常會員 中島きよ子

●米澤支會

○三島てつ子紹介
●米澤市 特別會員 渡部みか子

○吉見こま子紹介
●米澤市 甲種會員 南條こん子
●同 甲種會員 岡村ちよ子
●同 甲種會員 戸屋よそ子
●同 甲種會員 渡部よし子

○上倉たけ子紹介
●米澤市 乙種會員 櫻井ゆき子
●同 乙種會員 村山つき子
●同 乙種會員 竹矢きう子
●同 乙種會員 西條ふちの子

●會員種類變更

甲種より乙種へ編入 我彦せい子
同 國井たけ子
同 新井ちよう子

●新潟支會

○評議員荒川てい子紹介
●同市西堀通二番町十九番地 特別會員 岡野かしの子

○評議員河上ふさ子紹介
●同市古町通五番地 特別會員 中山さく子
●同京西堀通所藥學校内 通常會員 田中まち子

○事務所申込
●同市寄居町 特別會員 新妻みよ子

○評議員神尾つや子紹介
●同市下大川前通四の町　通常會員　工藤とく子

○小柴會長紹介
●同市東堀通四番町河上氏方　通常會員　阿部たか子

○幹事和田くに子紹介
●同市學校町二番町　特別會員　森田直子
●同市營所通　通常會員　小林わき子
●新潟縣古志郡長岡町玉藏院町　特別會員　山口淸子

○幹事中村志げ子紹介
●新潟市上大川前通九番町　特別會員　市川ます子

○特別會員南むね子紹介
●新潟市本町通七口町　特別會員　竹内かう子

○會員鏡淵りう子紹介
●新潟市本町通九番町　通常會員　鍋谷きな子

●會員種類變更
舊特別會員　改通常會員　中村きみ子
舊通常會員　改特別會員　田中喜意子

●茨城支會

事務所申込
●茨城縣水戸市　通常會員　大關八重子

●高崎支會

○特賛土谷全次君紹介
●高崎市田町七十五番地　賛成員　小林春造君

○保坂なか子紹介
●高崎市九藏町三十八番地　通常會員　長屋まん子

○大山うら子紹介
●高崎市本町百二十四番地　通常會員　小林きみ子

○相川すか子紹介
●高崎市本町　通常會員　相川はま子
●同　通常會員　後藤きい子

○藤崎きく子紹介
●高崎市田町九十三番地　通常會員　吉田千代子

○幹事三橋いろ子紹介
●高崎市大橋町七番地　通常會員　杉森よし子
●高崎市柳川町百廿三番地　通常會員　淸水よし子

○吉田友子紹介
●信州松本蟻崎聖マリヤ女學館内　通常會員　佐藤榮子
●高崎市新喜町三十四番地　通常會員　成田せん子

○保坂なか子紹介
●高崎市柳川町七十六番地　通常會員　信田きく子

○事務所申込
●高崎市柳川町百二十番地　賛成員　吉居謙一君

○殿島とく子紹介
●高崎市田町　通常會員　小川やを子

○幹事鈴木たね子紹介
●高崎市柳川町百二十八番地　通常會員　森さき子

○幹事秀島ゆき子紹介
●高崎市赤坂町　通常會員　長澤けい子

●轉居

▲會員諸姉御轉居の際は何卒姓名住所御記入事務所宛御一報相願候

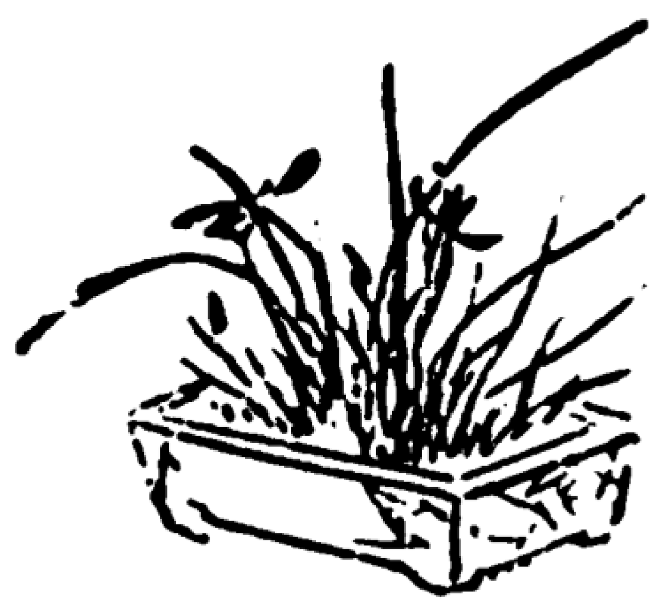
●和歌山市久保町四丁目水野氏方へ	上野延子
●紀伊國有田郡箕島町へ	中根美根子
●芝區巴町二十四番地へ	石黒よし子
●廣島市字大手町八の廿九へ	久松壽代子
●府下日本赤十字社病院内へ	北條おい子
●甲府市橋近習町百三十九へ	川上きん子
●千葉東葛飾郡市川町字市川新田へ	木間よし子
●北海道函館要塞病院へ	大木うん
●山梨縣中巨摩郡國母村二三八へ	松木よし子
●赤坂區裏三丁目廿三へ	岩船貞子
●廣島縣下廿日市三九四へ	松方愈子
●東京青山原宿百九十六番地	特別 横井忠顕君
●仝所へ	仝　昇子



●交換寄贈雜誌

●日本赤十字	京橋區築地二ノ二十一	日本赤十字發行所
●統計集誌	京橋區山城町六	東京統計協會
●をんな	麹町區下二番町三十七	大日本女學會
●大阪醫學會雜誌	大阪東區淡路町一ノ三八	大阪醫學會
●通俗衞生	大阪西區土佐堀通三ノ五六	大阪私立衞生會
●大日本婦人教育會雜誌	赤坂區表町二ノ十三	大日本婦人教育會
●藥學雜誌	牛込區下宮比町八	日本藥學會
●婦人世界	大阪南區末吉橋通四丁目	浪華婦人會
●産科婦人科學雜誌	日本橋區濱町三ノ七	産科婦人科學會
●學校衞生	本郷區西片町十	學校衞生研究會
●婦女新聞	牛込區東五軒町四十一	婦女新聞社
●愛國婦人	麹町區下二番町三十七	愛國婦人發行所
●藥石新報	大阪西區江戸堀下通	藥石新報社
●工手の友	大阪北區西野田嫁家内の町	工手の友新聞社
●實業新聞	大阪市南區心齋橋筋二丁目	實業新聞社
●日本衞生週報	甲府佐渡町十九	日本衞生週報社
●家庭新聞	熊本市北新坪井町	家庭新聞社
●兒童教育	神田區末廣町十	兒童新聞社
●衞生報知	神戸市相生町一ノ廿七	私立神戸市衞生會
●京濱實業新報	神田區北神保町八	京濱實業新報社
●東京藥事新報	京橋區新町四	東京藥事新報社
●東京教育雜誌	神田區錦町一ノ二十	東京教育雜誌發行所
●大日本私立衞生會雜誌	京橋區宗十郎町七	大日本私立衞生會
●婦人新報	赤坂區檜坂町五	婦人新報社
●産婆學雜誌	日本橋區濱町三ノ七	日本産婆學協會
●廣島衞生醫事月報	廣島市猫屋町	廣島衞生醫事月報社
●越佐教育雜誌	新潟市東仲通一番町	越佐教育雜誌社
●婦人と子ども	本郷區女子高等師範學校內	フレーベル會
●神經學雜誌	小石川區駕籠町東京醫科大學精神學教室內	日本神經學會
●新潟縣衞生會雜誌	新潟縣廳內	新潟縣衞生會
●婦人	神戸市三ノ宮町一丁目	婦人協會
●家庭割烹新聞	神田區佐久間町四ノ六	家庭割烹實習會
●牟婁新聞	和歌山縣牟婁郡田邊町中屋敷町	牟婁新聞社
●北海實業新報	北海道札幌區北二條東二丁目	北海道實業新聞社
●帝都新報	日本橋區本銀町四丁目	帝都新報社
●大日本耳鼻咽喉科會報	東京醫科大學耳鼻咽喉科醫局內	大日本耳鼻咽喉科會
●日本女學生	本郷區東片町百三十三	日本女學生會
●體育	麹町區飯田町二丁目	日本體育會

●衞生談話	麹町區飯田町四ノ三一	通俗衞生茶話會
●白梅	神田區錦町三ノ一	大日本看護婦人矯風會
●ひじり慈門寶鈴	愛知縣岡崎町菅生	慈善堂發行所
●あはれみ	神田區甲賀町八	動物虐待防止會
●催眠術新報	下谷區中坂町三六	大日本催眠術協會
●日本園	神田駿河臺鈴木町二	高田畊安君
●日本皮革時報	本所表町五十七	益世社
●數投界	麹町區飯田町四ノ二	研成會





出版廣告

故長與專齋先生遺著　全壹册既刊

松香私志

正價　金四拾錢
郵税　金四　錢

洋裝菊判二百頁肖像筆蹟及塋域の寫眞入

本書は長與專齋翁の遺著にして曾て孝嗣醫學博士稱吉君が出版されしものなるか今回更に同君より其版權を寄附せられたるに依り當文庫より再版に附することゝなれり

翁が終生本邦の醫務衞生の事に就て苦心焦慮以て其一生面を開き大に世を益せられたるは普ねく世人の知る所なり本書の名私志と云ふと雖も其實本邦の衞生小史と謂ふへきなり且此再版には翁の肖像親筆及其塋域の一斑を併せ掲げたり希望の諸君は當文庫へ申込まるへし

但御申込の節は必らす前金御送付の事

東京市京橋區宗十郎町七番地
大日本私立衞生會内（電話新橋二一七四）

長與衞生文庫

毎月一回三日發行

家庭之友

一ヶ年前金六拾錢

第二卷第四號發行（定價五錢 稅五厘 見本郵券代用六錢）

第壹卷（拾貳冊）合本（クロース製金字入 定價金七拾錢）

堺枯川編輯

家庭雜話

第一冊子孫繁昌の話

第二冊質素儉約の話

第三冊仁慈博愛の話

全三冊 一冊金廾五錢 郵稅金四錢宛

以上合本 總クロース金字入 金壹圓郵稅八錢 製本堅牢體裁美

羽仁もと子著（振假名付）

家庭小話

定價金貳拾五錢 郵送料貳錢

（萬朝報評）著者の文章は穩健暢達とでも云はうか善く分つて無駄が無くてそしてシッカリした所もあつて家庭の問答を語るに尤も適した筆致である

西洋化粧法

送料共拾錢 郵券代用諾

版元 東京本郷駒込西片町十番地 內外出版協會

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會々員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ

第二條　會員章は本會并に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は左の實價を以て會員に頒つ





●本會徽章料左の如し

●通常會員章

第三號　メッキ製拾二錢、送費六錢

●第二號　正銀製四拾錢、送費六錢

●終身及特別會員章

第一號　七十錢(黑塗箱入送費九錢)　六十錢(桐箱入送費六錢)

●入會注意

●御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるへし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼ね會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收者差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料をも御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局(東京麹町飯田橋通)宛振出あるべし又た價格表記通運便、何にても差支なし●會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

●會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌進呈の事

本誌一部定價貳拾錢

廣告料　一頁五圓半頁其二分一以下同之　●特別廣告一頁拾圓半頁其二分一以下同之

發行所　東京市麹町區飯田町六丁目三番地　私立大日本婦人衛生會

編輯兼發行人　東京牛込區矢來町三番地　田中德三郎

印刷人　東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　渡邊智

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場印刷

明治三十七年八月二十四日印刷及發行
婦人衛生雜誌第百七拾七號(毎月一回二十日發行)